



前書き

甲陽学院高等学校文芸部2022年度部誌を手にとって(又はオンラインでご覧)頂き、ありがとうございます。本来この前書きは伝統的に部長が書くことになっているのですが、部長のクズ...失礼、小佐々が「君さあ、部誌の前書きとかやりたくない？」と言葉巧みに僕をだまし、前書きの仕事を押し付けた...前書きという光栄な業績を譲ってくださったので、本来は書くはずではなかった一年生の僕が書くことになっています、本来は書くはずではなかったのに(大事な事なので二回言いました)。僕のことはさておき、今年の文芸部は音展以外の時にも自主的に部誌を作るなどかなり積極的に活動しています。結構大変ですが(主に部員が)その分楽しくもあります(主に部長が)。こんなに駄文をつらつらと書き連ねておいてなんですが、そろそろ読者の皆様が部員たちの作品を読むのを邪魔立てするのも心苦しくなってきました。至らないところはまだまだ沢山ありますが、どうか暖かい目で楽しんだり共感性羞恥に悶えたりしていただければと思います。

福本 弘吾

目次

heavy rain lluvia

鯨。 エヤミクサ

煙々羅君の詩集 煙々羅

俳句・短歌 煙々羅

猫又学舎物語in戦国乱世(第二章) 図書委員_3110

冒険 東条拓也

伽藍亭 メフィストフェウレス

桜舞う日に(第二章) 高坂あおい

アナザー・サイド・オブ・ガールズ ひつまぶし

動く自由 クロンショー

カップ麺三個分の特撮のようななにか(EP2) 二荒洋介

あとがき

特典小説 名目上文芸部！ 有志一同

heavy rain

lluvia

最近君の機嫌が良くない　この頃皆君を避けてる
分厚い石の壁を隔てて　君の必死のことばにも　耳を貸そうとしない
ただ河 あいつだけは理解して　皆に伝える努力をしている
だけど君は知らない　雨あがりの空を

鯨。

エヤミクサ

巨岩となった鯨。　砂の大地を海とし。　翔びたたん。　天を目指して。
尾びれを大きく。　からだをうねらし。　あの光を。　翔ぶ。
泡がぶぶく。　飛沫がすさぶ。
渦ができ。　波ができ。　砂の海。
過去の鯨。　巨岩となった鯨。　光を求める鯨。永き鯨。　今も翔ばん。
儚げに残る巨岩

街のカラス

煙々羅

カラス、とぶ。　街中を。　鷹を、鷺を、鳶を、恐れず、とぶ。
カラス。羽ばたき、滑空。雲の下を行く。白い空にある、黒点。力強く、行く。
カラス、あるく。　街中を。　人を、車を、自転車を、恐れず、あるく。
カラス。　足をあげ、トコトコ。　並木道、桜の下をゆく。　人間模様うつす道に
いる、一羽。
胸をはり、行く。

ゆめのさき

煙々羅

夢ノ崎の荒波に
 春の風は似合わない
 花弁は流れ 浮き沈み
 泡沫とまじり 夢ノ崎の河口へと

夢ノ崎の空は青 竜胆のような 青の下
 終ぞ乙女は 髪を解かず 岩壁と 麗しくも顔は何処と

夢ノ崎に夢はない
 ただ荒涼とした眠りが 吹きすさぶ

それはいずれか君のもとへと

髑髏

煙々羅

しゃれこうべ こうべ垂れ カシラ跳ぶ 「南無阿弥陀仏」

洒落た服 洒落た靴 洒落た人 シャレ骸骨

極楽の蠅

煙々羅

すておかれたキノコ 蠅がとまる キノコ

繊維の その中のひとつ 燻んだ繊維に蠅は腰かける 極楽か？

鴉の空

陽を吸うオリーブの木はシンシンと伸び、空を指す
空は青く、雲が散れる、風が吹ける
数多の鳥が、風にふれ、風にゆれ、天空を斜に飛ぶ
大海を漂う、小舟のように
大都市で見る、その緊張った服を着こなす人々のように
大衆の鳥は太陽の下
散り散りと、されど大きく
ゆれて、ゆれて、ゆれて
風と共に、空を指す

今、大鴉が羽ばたく

地球と蚊

煙々羅

馳せゆく蚊 森 慌ただしく 轟轟熱中 草ソウソウ
火柱立つ 蚊柱立つ 目眩み 暗み 轟轟轟轟
エキス抽 溢れ垂れ 硝子瓶 雫 結晶 液ス
転がるチ球チ面チ下 蚊 影 ぼつん

トント・トントン

煙々羅

トントだめビト　もちあがる　さらさと魅せる

濡れ鴉 床を踏み抜き 轟音ヲ カンと響く

よれ響き 而して はじまりはじまり トントントン

蛙の日々

煙々羅

春の頃、春の頃、梅が散り、桃も桜も散りゆく春の頃、外を知った蛙は土を這い、塩の街へ、蟲を食い、池で休み、草に隠れ、湿った石影の下で眠る、それを繰り返し、繰り返す、変わり映えのない日々、朝見る空は薄く、夜見る月は薄く、日々暑さは増し、日々騒がしさは増し、閑けさなどない道中、蛙、山に登る、緑が青々しく、蟲は多く、蛇は多く、日々涼み、日々隠れ、日々腹を満たす、それを繰り返し、繰り返す、何度雲を見たか、何度星を見たか、大して変わり映えない道中、蛙、巨岩で涼む、やがて風が吹き、大海を臨み、再び巨岩で涼み、岩陰へ、花と共に涼む、その夜、雨に濡れ、月に謡う蛙は、同胞と出会い、共に歌う、夜、夜、夜、月を臨む夜の頃、夜の頃、そうして時は経ち、子が生まれ、働き、遊び、そして歌う日々、変わらない、変わらない、繰り返す、繰り返す日々、木々は色づき、池は黄色く赤く、飾られて、されど変わらず風は吹く、月は池を照らし、星は子を見守り、日々は過ぎる、蟲を食い、岩で涼み、草に隠れ、子と遊び、夜に歌う、繰り返す、繰り返す、木枯らし吹くまで繰り返し、枯れ落ち葉を踏めば、その晩、月に歌う、そして一家は月に謡う、謡う、謡う、草花を揺らし、木々を揺らし、謡う、謡う、そうして明け方、土に籠る、変わらぬ、変わらぬ、日々が来る、暗く、暗く、月も、星も、見えぬ夜、微睡み、微睡み、日々過ぎる、繰り返し、繰り返し、微睡み、微睡み、夢の中、蟲を食い、岩で涼み、月で歌い、子と遊び、繰り返す、繰り返す、夢の中で繰り返す、変わり映えのしない、日々が繰り返す、暗い、暗い、土の中、微睡み、微睡む、土の中、土の中、土の中、土の中、●、●、●、●、●、●、●、●、●、●、●、●、●、●、○、夜は明け、蛙は土を這い、うらか春を謡う、謡う、謡う、こうして夢の日々がつづく、空を見、雲を見、鳥を見、風を嗅ぎ、蟲を食い、草に隠れ、花を見、月夜に共に歌う、そんな日々をまた繰り返す、歌う、歌う、おぼろ月夜に共に歌う、こうして時が経ち、子が生まれ、戯れ、戯れ、戯れ、日々を過ごす、繰り返す、繰り返す、変わり映えのない日々を繰り返す、日々、日々、日々、日々、繰り返す、繰り返す、年々、年々、年々、繰り返

[illegible]

月の下

煙々羅

酒屋のオジサンが 私を殴る

酒瓶はチラバリ 仔猫がガラスを踏む

こめかみから垂れる 真っ赤な血をおさえて 真っ黒な路地裏で光を見上げる

月かと思った輝きは 一本の街灯でございました

ヨダ力のいない星

煙々羅

ヨダ力が堕ちた先で笑え 平気な顔で肉を食え

勝手に肥え太らせた牛豚どもを食い散らし余った皮と骨で椅子を作れ

生きる為だ、仕方ない

鍬を振り下ろした畑から骨が出る 犬骨か、豚骨か、牛骨か、人骨か

骨は芽生えの邪魔となるからと放り　この地には墓のひとつもない

実直に働き日々生きる人の内の一人であれ

鍬をふりおろす人であれ ヨダカを笑う人であれ

真っ当に生きる為だ、仕方ない

それでもヨダカが好きというのなら

事切れてからヨダカとなるがよい

この星の土となるがよい この星はそうしてできた

この星の畑にヨダカの骨はないが

一つの子守唄

煙々羅

こんばんは

ひとりま暗で小泣くお子 おいおい舌嚙み小泣くお子
そんなに夜が怖いのかい さざればさざれば行きましょう

ひとりま暗なお星さま ひとりひとりでまつあの星へ きっと君を待っている

あの星この星どこの星 君とよく似たお星だよ
夜が怖くて小泣く星 おいおい泣くのさ 君みたい

さざればさざればお星さま 寂しがり屋なお星さま
あか目で眠るお星さまに 毛布を掛けに行きましょう

きっと寝顔は愛らしい そしたら夜もすごしかろう

ジャングルの轍

煙々羅

ジャングルでダンプカーの雄叫び

ユケッツアー ユケッツアー ユクノダッ！

轟轟轟轟轟轟轟轟轟轟
轟轟轟轟轟轟轟轟轟轟
轟轟轟轟轟轟轟轟轟轟

ミチが拓ク 光が増ス

蟲ヲ 草ヲ
花ヲ 樹ヲ
踏み潰ス

車輪が大きく鼓動 排ガスが大きく躍動
ドウドウドウドウ
大きなミチを拓ク
車一個分のミチ

大きな大きな 広い広い広いジャングルで 果てしない
尽きはしない 夢のジャングルで ダンプがユク

轟轟轟轟轟轟轟轟轟轟
轟轟轟轟轟轟轟轟轟轟
轟轟轟轟轟轟轟轟轟轟

ダンプの中では一人のおっさんが空しく気だるげに腐ってゆく
ミチはツツク

幽霊と花と白

煙々羅

1

夜は怖い。 暗くて暗くて怖い。

家から出てみたらそこは真っ暗。 月も星も雲に隠れてしまった。 いけずな雲。

真っ暗闇に白い花。その白さは明るい。明るくなければ白ではない。 月の花。

白い花とその幽霊。 月と幽霊。 果てにはさざなみ。 海の音。
幽霊船の出航。 白い花束の葬送船。

2

白い壁。 長い壁。 幽霊な壁。
壁はアスファルト。至る所にアスファルト。壁はいずれ途切れる。白い押し花。

月の下の花の幽霊。 白。 幻想と狂騒と。 宴はいつも静か。 幽霊は。
夜の冷たさは幽霊。 風の冷たさは。 肌の冷たさは。心の冷たさは。つまりは。

3

夜。 いつまでも。 影に覆われた一日。 そんな一日に咲く花。 白い花。

枯れ尾花は腰曲がり。白い花は凜と。その幽霊は凜と。夜の若さ。幽霊の親しさ。

童

煙々羅

この国の一等美しい場所で。 童が夕陽におはようさん。 夕焼け烏が帰る時分。
童が一人人を待つ。 夕焼け烏やさようなら。 烏も応えてさようなら。

この国の一等美しい。 童歌が歌われる。
影の高さは未来だと。 童は得てしてはにかんだ。

この国の。 綺麗な影に。 色はない。

童の影が。 一人。

ポツン。

春

煙々羅

心して 祈る そうして、、、

春が来た そうか、来たのか 春風が吹く

春がおわる そうか、終わったのか

怒る達磨

煙々羅

机の上にある達磨 転びて転びて落っこちる 達磨の顔は相変わらず無愛想

怒ってるの？ 怒っていない

もしかして悲しいの？ 否、悲しくない

じゃあ、なんでそんな顔？ 元からこんな顔だ

ねえ、笑って 笑ってるさ、いつも

達磨は相も変わらず無愛想 でもどこかニヒルな顔

フフッて、聞こえた気がする

笑み

煙々羅

とある場所。 とある人。 とある思い。 素知らぬ顔の桜がひとつ。
花は散り。 葉は繁り。 花は散り。 葉は繁り。 いずれ枯れ木と。

しかしてそれを見届ける者は己のみ。 墓は自然とひとりばかり。

それを知らずに微笑む。 いずれの墓場で。 知らずに笑む。 墓場で。

誇る影の。 繁る影の。 淋しい影の。 下で。 笑む。

その笑みでまた。

消えた少年

煙々羅

ひとつ雨がふります

うたれる少年は次第に溶けて砂となります 砂は次第に穴が開いてゆきます

少年は砂となっても死んだのです

雨がふったからです すべて雨が悪いのです 傘を放りなげた少年で
なく すべて

翌朝、そこには何もありませんでした 雨の痕さえも

硝子の中の少年

煙々羅

硝子の中に埋め込まれた少年の顔は歪んでいた

きっと苦々しいのだ　きっと硝子の中は手狭なのだろう

蝶のように大人しく硝子の中にいる少年は今日も息をする　多くの人の目に晒されながら
不恰好な姿勢で硝子の中で　顔を赤らめることもできずにひっそり息をする

少年が収められた硝子は時に街中で時に美術館で時に富豪の家へと運ばれた
その硝子はどうやら一種の骨董となったようで　次から次へと人の目へと晒されてゆきました

かの芸術を知らぬ者はなし　そう呼ばれるようになった少年の顔はやはり苦々しい
老いも若きも恥じらいややるせなさもすべて詰め込まれ心と時間に漬けられた少年

さて、いつになったら硝子は少年を解放するのだろうか

夜でようこそ

煙々羅

夜を扱う　その店に訪れた人は　いつも可笑しな感じ

夜は月がよく見えるから　酔ってしまったのか　歩けぞ歩けぞ闇を踏みて

浸かる極楽浸る安寧　ネオンを笑う子猫の親はあらるらに　あらるらに
どぼりと沼に　そしてポツリな丘に　夜の先には夜だけが　朝が来ても夜

奥暗く竹に掴まりあの月へ　店の駄賃をねだりに行った

与太郎はべべれけべっべ　某の墓にて花火して灰　与太の与太の舌で舐め土

そこはかと鹿の味　埋もれた死骸は鹿の長　立ちて歩きて蠮螋と　角角角
土竜が募る蚯蚓達は　月光を浴び　ぶくらぶくらとヒトとなる
屋台でココロを買って人となる

くぐらさ　くらさくらさ

人面瘡憑き土に還る　桜の根元さ　顔顔顔

目売り鼻売り舌売り手売り足売り心売り　屁さえこけぬと泣くお子あやす

人が行き交う夜の店　奥暗く回転椅子がひとりごち　マダラ子猫は夜と笑む　店

不徳ノ山羊

煙々羅

荒夜　ナニヲ見タ

荒レ地ニタツ峰　陰シキ岩崖　其ノ先デ　朔月　山羊ノ黒目ニ白ト

白キ小花ノ灯　峰ノ先ノ燈　捲レル風ニ温モリ取ラレ窪ミノ蟻ノ孔ヘト

其レヲ素知ラズ荒城ハ聳エル　素知ラズ山羊ハ貪ル

月下ヲ歩ム　花ヲ喰ウ為ニ荒城ヲ進ム　不徳ノ夜ヲ過ゴス

月下ノ荒城ノ山羊ノ跡　姿ナキ小花

砂中に住む

煙々羅

砂に住む人に会いに行った　偏屈な爺に会いに行った

爺はこちらを見て言った　ご機嫌麗しさようなら　挨拶にはこう返す　どうもありがとう
爺から虫をもらった　贈答にはこう返す　どうもありがとう

爺はほろほろ砂落ちる土の中に住む　カンテラをよく大事にする
爺に良いものをやる　蛍だ　爺が蛍を押し返してこう言う

砂に蛍はいらん　手中に収まる死んだ蛍　帰途でアリジゴクを見つける　砂の虫は喜んで蛍を食った

老婆の赤い帽子

煙々羅

帽子を赤い帽子を取っておくれ

それは大切なものだから丁重に取っておくれ

そっとわしにその帽子をかぶせておくれ

大切なものだから 丁重にかぶせておくれ こんな老婆にこの帽子は不似合いだろうけど

大切なものだから 丁重にかぶせておくれ

赤い帽子はありません どこにもありません

それでも老婆は語ります 朗らかに語るのです

老婆だけに見える赤い帽子はやはり良いものなのでしょう

夜の生物

煙々羅

夜に生きる一生物ののどかな一歩、踊るよう祈るようなただ一歩、吹き荒ぶ風を舐めとり深く悲しむ一個体の小さな一歩、怪と呼ばれるモノの寂しげ一歩、それはそれは優雅な夜です。

月の下の花を愛でる一生物の愛らし一声、儚く気高きただ一声、夜の暗さに怯え震える小さな一声、それでも気丈に振る舞おうとする強き一声、それはそれはよく月が照る夜のことです。

土に潜んで夜と味わう一生物の安らぎ一睡、夢こそ夢と知らぬただ一睡、仄暗さがこそが友だと言いたげ一睡、小穴の側で小花が眠れるを知らぬ一生物のただ一睡、それはそれは穏やかな夜です。

怯えて暮らす一生物のただ一生、怪と呼ばれし一個体のただ一生、夜に紛れしその一生、それで尚しあわせと言う一生、それはそれは暢気な一夜です。

真にそれはそれは、夜です。

早三年

煙々羅

早三年

枯れし桜は捨て置かれ 人を喜ばすは酒のみと うなだれ果てて道端で眠れるは人

哀れ人よ 哀れ酒よ 哀れ哀れよ

潔き老木はすでに形のみと あとは朽ちるを待つのみと 咲かぬ桜が咲かせる花は
なんとも美しいと嘯かん

はて踊れ 今宵は祭りぞ 早三年

来ぬ春が来たと喜べ木枯らして 木枯らしが来たと思えよただのひと風で

はて踊れ 今宵は祭りぞ 早三年

酒で火照った体にはただの風さえ冷たかろう 解っていたとして臍げ冷たかろう

早三年 そう早三年 今宵も酒に溺れ眠れるのだと そう思うて寝たのはいつまで
だったか

あゝ、三年 変わることなきこの万年

鉄塔の町

煙々羅

鉄塔のむこうで膨れ上がる積乱雲 青い空に白に鉄

連れ立つ電柱の先にみえる山嶺 美しき姿 人の姿

名無し

煙々羅

墓標がひとつ 荒れ地にひとつ 悲しみがひとつ

雨がふれば草は喜ぶ また墓も喜ぶ また も喜ぶ

小さな鉄路

煙々羅

電車がゆくりと軋んで動いた

真っ直ぐとレールを走る カタカタカンカン 走る 走る
走る 時折とまって また

カタカタカンカン 走る

走る 走る

見えないレールに身を預け ふくらの赤いクッションに身を預け
預かり知らぬ電線に身を預け うつらうつらと
今日も鞆を抱えてアルミの電車で地を巡る

知りもせぬこの土地で うつらうつらと
カタカタカンカ カタカタカンカン

偉大なる旅の綴りのすべて

煙々羅

赤るい空で藍を探せ

故に箱載る 箱は空っぽ ほら空
藍は土ん中 草だもの から空の箱栓をポン

要らんはポン落くら土 千鳥と行く箱の奥 で在る藍
抱きしめたらストーン 藍は重いから古紙破れ

綴じ継ぎ接ぎ ポン本 空の本を背負って

赤るく刎ねる空で藍の足袋がポン 損だけ

薔薇と蠅

煙々羅

薔薇散り残る 残る残る
分厚い葉が二三 他は枯れ枯れ

寄るは蠅々 倚るは阿呆 手折られ飾られ捨てられる

それでも這い寄るは蠅

麒麟

煙々羅

街中を麒麟が歩く 長い首をゆらしてゆったりと
この街が昔ジャングルだった頃 きっと恐竜が歩いていた道を
ゆったりと 雪の降る日にまた麒麟は歩く

人のいない道をただひとり 仲間のいないこの街で ただ雪に埋もれてゆきながら
ただ歩く 冷気を知っても変わらぬ麒麟の黒目は四角いビル群を見て
自然と白く吐息を

このジャングルで恐竜達は 木を見て 花を見て 草を見て 蔦を見て 同胞を見
た きっと白い吐息とともに 星の欠片が降るその時まで 彼らは
道を歩んだ その道を流し目でひとり歩く その高い背
姿は次第に雪で霞んでゆき 街はすっかり雪に埋もれてゆく

スノードームとなった街で麒麟はひとり彷徨う

安らぎの森

煙々羅

象牙の城 眠る人 林檎の森の奥深く
迷えた象の骨で休む 象牙の城もまた同じ 迷える人を休める

眠る人 森の森の奥深く
夜の安らぎで吐息 その寒さで震え 太い骨に寄りかかる

ぼつりぼつりと 眠るような象の姿 骨

林檎の森の奥深く もぎり口元を汁で汚す 隣で虫も這い蹲って啜る

奥深く また眠る 骨を背に 辿り着かぬ象牙の城

蛙の足

煙々羅

ふと思う 蛙の足を 道草でのこと 雨のこと 傘なき己の濡れる髪 服 手
そして足 足は棒 大根 蛙 そう蛙

水槽でのこと 晴れのこと 蛙となれる 股を開けて
大きく 脚を曲げて 力強く 蛙の足となれる

しかし やはり 人 雨雲を喜ぶ 蠅を喜ぶ 蛙となれず
畦道を歩く人となれる 雨のこと

蛙は草野で唸りつつ
おいこら合唱 蛇は来ぬ 幻想

人が歩く畦道でのこと 雨に濡れ思う 蛙の足

鱗

煙々羅

金魚の鱗 ほろほろり
水槽を泳ぐ度にほろほろり 硝子で歪む子供の顔も大人の顔も
金魚の前では水草のよう ほろほろり ほろほろり

金魚の肉赤く 血肉はいずれ鱗となり
ともにともにより赤く それは泳いで鱗を落とす ほろほろり

糞尿とともに鱗は水底で溜まり 気まぐれに巻き起こす尾びれの渦で舞おこる
その中をゆくりと行く金魚 美しいからといってそれは己の鱗を落とす

ほろほろり ほろほろり 美しいからと ほろほろり

骨

煙々羅

荒ぶ坂にて人は骨 ひとりでに歩いて崩れ骨 ゆくりと進まず有るは骨
積もりて山となすは骨 粒ともならず残る骨 荒ばずとも人は骨

金平糖

煙々羅

懐の金平糖
甘味

星にかざして金平糖

瓶詰めに詰まった

歯に響く金平糖

金平糖

幼き思い出

道を見てゆらめく影で蝶を知る何処へ蝶よ坂道つづく
山中に建つ五重塔小雨暮れ幾重の道を辿る紫陽花
天高く伸びづる蔓の行く末は空の白さを知らぬ身の末
月冠樹とどけとどけよあの空へしずかな夜に散れる銀色
青い鳥ハシビロコウは幸福を携えて待つしあわせの鳥
背と腹が紙一枚と変ずれば千切れり裏離裏紙散り吹雪
ため息となれずに腹に渦巻いて目さえ回らず千鳥と歩む
心なき人の心なし歌の人でなし響きに酔いしれ人

薄れゆく月で死んでは菜の花で
象の鼻ゆるやかにのびて絡みつ
鉄砲を帯びて行く行く水遊び
夏草に並べよ並べとんぼども
僧としてうまれた蝉は坂にて死
鄙びれた向日葵を背に庇い立つ
願わくば墓の花の赤となれ
上手い死で馬に生まれて畜生と
鈴虫の鳴かぬ夜を眠れるか
木枯らしとともに飛び立つ梟ぞ

猫又学舎物語in戦国乱世 第二章

図書委員_3110

あらすじ

高校三年生の加藤良彦は共通テスト初日に車にはねられて死亡。そして「術・知識・戦争・死」の神である(と、天使が説明していた)龍神の部下である天使によって猫に転生させられた。

そして20年生き、猫又となる。1555年、信長が武田の手のものに暗殺されてしまう。それと同時に彼は信長になり代わった。

そして、本能寺の変にて明智光秀(彼も猫又)と決闘をし、和解し、家康に無理矢理許可を取って「そして猫又のための学び場」である「猫学舎」(猫又学舎)を駿府城内に共につくる。そして入学式が行われた。その後、適性を調べた。

人物紹介

名前:(出身)・遁術の適性・(性格)の順で書いてます。

教師

信長:水遁・仙遁

光秀:雷遁・法遁・時空遁

義宗:犬猫山・火遁

牧彦:小田原・防御魔法・剣術

守彦:小田原・土遁

萩若:仙台・風遁

仙台系

宗治:法遁・しっかり者だが稀にやらかす(引率)

月宗:仙遁・正直者

春宗:水遁・まぬけ

頼宗:炎遁・熱血ドジ

葵:雷遁・冷徹・鬼才

小田原系

雅彦:炎遁・天才・簡易系の術が全般得意(引率)

黒彦:雷遁・意地悪

良彦:水遁・しっかり者

白花:風遁・剣術師範級・冷静

犬山系

和若土遁(簡易仙遁)完全中立派・事勿れ主義(引率)

冬若:土遁・努力家

春若:風遁・絶対安全主義

雪華:雷遁・冷静沈着

宝珠:遁術を強化できる道具。宝珠の持つ属性と同じ属性の遁術はより強化できる。

天使様:「龍神」の部下。名は黒耀姫。
第二章

「ふう。思ったより疲れたわい。」
「で、信長様、私の適性は...?」
「俺の適性、なんだったの?」
「僕の適性はどうだったのですか?」
ガヤガヤガヤガヤ
「寮の入り口に貼っとくから見とけ!では、解散!」
と、信長様は言ってそのままどこかへ行ってしまった。

「なあ、月宗。解散って言われたけど、何しよ?」
「んー、ひとまず部屋帰って将棋しない?」
「飯は食べないのか?」
「うーん.....」
「どうしようかなあ...僕も将棋しようかなあ...」
「おい、黒彦一、良彦一、飯食べるなら一緒に向こうの通りの店に行かない?」
「ちょ、春宗!勝手に別の系に持ちかけないでよ!」
「ん?どんなお店だ?」
「えーっとね、魚を1日味噌につけてそれから煮込むんだってさ!なんか美味そうでしょ?ね!行こうよ!」
「へっ!おまえらなんかと一緒に食事なんてするわk」
「おお!味噌煮ですか!それは良いですね。ぜひいきましょう!」
「だってさ、月宗、早く食べに行こうよ!お腹すいたよー!」
「おい、良彦、なぜあいつらと飯食いに行かないといけないんだ!」
「えーとですね。何か変なんですよ」
「ん?変とは?」
「月宗だけ他の連中とはどこか違うんですよ」
「ふむ...」
「その理由は私にもわかりませんが、ひとまず、交友を結んでおくのは悪くないと思われます。」
「なるほど。ま、それならわかった。ちょうど腹も減ってたしな。」
「じゃ、道案内するからついてきてねー!」
「はいはい。わかりました」
その店で食べた魚の味噌煮は割と美味しかった。その日は部屋に帰って将棋やら囲碁やらして遊んだ。
そして帰ったら光秀様が信長様をひっぱりながら走って来た。
「おい、おまえら、居るか?」
「あー、僕たちは仙台系は小田原系とご飯食べに行っ、さっき帰った所です。たぶん犬山系はちょうど向かいの部屋で遊んでると思います」
「わかった。ありがとな。えーと、一旦全員部屋から出て大広間に集まってくれ。たぶんすぐ済むと思う」
「はい、わかりましたー」
しばらくして、

「全員集まったな。えーとな、さっき明日からの時間割を配ったけど、あれ、配り間違えなんよ。すまん」

「……………」

「あれさ、犬山の猫学舎で使われてたやつなんよ。それらを参考にして時間割り作ったのに間違えてそっちを配ってしまった、というわけで…」

「す、すまぬ…」

「あれ？先生。なんで猫又が通う塾なのに猫学舎って名前なんですか？」

「あれ？義宗って犬山から来たよな」

「はい。そうですね」

「なんで猫又学舎じゃなくて猫学舎って名前なんだ？」

「確か、元々猫又だけでなく猫も通ってたからだったと思います」

「じゃあ今から猫学舎はやめて、猫又学舎と呼ぶ事にするか。よろしいですね？信長様」

「ああ。わかった」

「なんか話逸れたな。本題に戻ろう。その本来配ったはずだった時間割を今から配るぞ」

「はい」

「念の為口頭でも説明すると、一年を七日で区切る。これは前の時間割と変わらない。その上で、一、三、五日目は午前、午後、共に基礎遁術演習。二、四、六日目は基礎体術演習。そして、七日目は休み！」

「よっしゃあ！週一休みキタァア！」

「週一で休めるー！」

「嬉しいー！」

「おまえら19世紀の会社員か？」

「え？」

「いや、なんでもない。気にするな。ま、明日から授業するからなー」

「はい！」

その返事を聞くと光秀様は信長様を引っ張って大広間から出ていった。

「……………信長様……ドジなの？(小声)」

「……そうなのかなあ？」(笑)

「おーい、おまえらー！さっきからわしを馬鹿にしてるけど、全部聞こえてるからなあー！後で覚えてろよー！」

「………………。怖っ!!」

その日はそのまま部屋に帰って遊んだ。

そして次の日から授業が始まった。

最初の十四日間は基礎遁術演習では、牧彦先生以外の先生に教わり、全員〔風、岩、雷、水、火〕の各五属性の礫と手のひらと同じくらいの大きさの球を放てるようになり、基礎体術演習では牧彦先生に徒手格闘と各五属性の壁を教わった。

春宗だけよく居残りで個別指導させられていた。

以降も色々遁術などを教わった。最初に調べた適性の術を中心に学んでいった。

そうして半年が経過した。

外を先生と生徒、引率者の総勢十九人で歩いていると、急に空に黒い雲が渦巻き、その中心から大きな雷が落ちてきた。

「うわああああ！」

「きゃあああ！」

「全員わしの後ろに下がれ！」

続けて火の球や巨大な岩の塊が落ちてきた。

「全員早く下がれ！光秀！」

「わかってる！〈法遁・法衣の加護〉×19！〈時空遁・絶界転移陣〉！」

「なるほど。攻撃を別の所に飛ばしながら防御を張るわけか」

「ふう。これでなんとか防げたああああ!？」

急に全員の足元に光秀によるものではない絶界転移陣が展開された。

「おい、おまえら！生徒を退避せろ！」

そう言って信長がさらに前に出た。

「ま、間に合いません！」

「チッ。仕方ない。教師陣は衝撃に備えて、各自防御を張れ！」

「はい！」

〈風遁・風球陣〉 〈土遁・土流壁〉

〈雷遁・雷神壁〉 〈水遁・水球陣〉

〈火遁・火炎陣〉 〈仙遁・龍壁〉

「空中に転移したぞ！」

「全員、受け身をとれー！」

「了解！」

「あいよー！」

ドスン！

「ふう。なんとか無事か。にしてもここはどこだ？」

周りを見渡してみると、一面森で、囲われていた。

『すみません。少し調整を間違えて、空中に転移させてしまいました』

「ん？って、天使様!？」

『ええ。お久しぶりです』

「ところでここはどこなんだ？なぜこんな所に転移させたんだ？」

『えーとですね、ここは人間達が高天原と呼ぶ場所ですね。具体的には信濃国周辺の山と森。二十世紀では中央アルプスと呼ばれる所ですね』

「え？よく今までこの場所が知られなかったものだな」

「え？え？高天原って……」

「……ええ？高天原？えええ？」

『それはですね、黒龍神様と白龍神様と天照様が周囲に結界を貼ってくださってるからですね。ほら、あれですよ』

「んー？確かにそれっぽいものが見えるな。というか、今、さらっと変な情報が出ましたけど!？」

『それについてはわしが説明しよう』

「えーと、黒龍神様ですか？」

『ああ。そうじゃ。そもそも、ここに転移させたのはお主らに頼みたいことがあるからじゃ』

「わしらに？何でございますか？」

『わしと白龍神と天照の争いを止めて欲しいのじゃよ』

「ん……？黒龍神様に加勢して戦えば良いという事ですか？」

『事はそう簡単ではなくてな、そもそもあまり強力な術を使うのは控えるべきなのじゃよ』

「……？」

『今、天界では白龍神率いる白龍族と黒龍神率いる黒龍族と天照率いる神族で争っているのじゃよ』

『今の私は天使の格好をしてるけど、ただの変化の術によるもので、実際は黒龍族で、名前は黒耀姫よ』

「……」

『それと、10年くらい前にした龍神様の説明も嘘よ』

「……………」

『？？？、話の途中で割って入るのをやめろと何度も言っているじゃろう！あ、話がそれたな。元々、術を打ち合って戦をしていたのじゃが、ある時、白龍族の研究者が遁術を使いすぎると死んでしまうと気づいたのじゃ！』

「……………え!？」

「え？先生、どういう事？」

「先生、先生、そもそも龍神って何？え？」

「え？ええ？……え？」

『話の途中で口を挟むな！今から詳しく説明する！』

「は、はあ…」

『そもそも全ての生物には精神に宿る魂である魂(こん)と肉体に宿る魂である魄(はく)がある。遁術はその魂と魄を全ての生物より少しずつ集める事で使える』

「ふむふむ。なるほど」

「へー、そうなんだー」

「え？魂の一部を取って大丈夫なの？」

『もちろん、大丈夫なわけではない』

「……………へ？」

『あまりにたくさん大規模な遁術を使うと、自然治癒力を超え、魂魄は、二度と戻らなくなる。そして、魂魄が戻らなくなったら、あとはただ死ぬのみじゃよ』

「……………んあ!？」

『で、あるから、そもそも大規模な遁術はほとんど使ってはいけないのじゃよ』

「……………え？じゃあわしらは何をすれば良いのじゃ？」『簡単な話じゃ。交渉だけでわしらの争いを止めてくれ。頼むぞ！』

「え……まあ、頑張るけど…」

『ん？』

「天照と白龍神の居場所がわからないだが……？」

『ああ。そうか。すまんすまん。えーとな、この結界は半径12キロ？だったっけ？キロという単位がどうもわからなくてな。で、その中でわしは最南端、白龍神は北東方面の端、天照は北西の方面の端に拠点を持ってるはずじゃ』

「わかった。光秀ー！転移陣をてんk」

『あー、それは無理だぞ』

「……………へ？」

『この結界内では結界の中を移動する転移陣は使えないのじゃ』

「え？」

『何故かわからないが使えないのじゃ。わしにも白龍神にも天照にもわからない』

「.....わかった。じゃあどうやって白龍神や天照の所へ行けば良いのじゃ？」

『徒歩。それしか方法はない』

「はああ～～、だる！」

「ひとまず準備だけして、明日の朝、行くとしますかな」

『わかった。黒輝姫よ、彼らを客人用の部屋に案内して差し上げよ』

『承知いたしました。じゃあ案内するよー！こっちについてきてねー！』

その日はのんびりと寝た。客人用の部屋にはそれぞれ温泉が付いていた。とても気持ちよかった。

あとがき

こんにちは。図書委員_3110です！ここまでお読みいただきありがとうございます！今回はサボりました！ホントはもうちょっと書こうと思ったけど、時間がなかったの、今回はここまでです！すみません！次回をお楽しみに！

冒険

東条 拓也

冒険ってなに、そう聞いたことがある。それは世界を広くすることだ、そう答えてくれたのはおじいちゃん。もうこの世にはいない。一年前の九月、まだ暑いその日に脳梗塞で亡くなった。

誰かの命日にだって学校はある。授業を終えてぞわぞわとした気持ちを残したまま、坂道を歩いて家に帰る。途中、自販機でお茶を買った。道路を挟んで反対側は総合病院の敷地で、見える大きな建物は病棟だ。そのためか、辺りは閑散としていた。

不意に呼びかけられ、振り返ると学生服を着た少年が立っていた。服はパリッとしていて丁度呉服屋で買ったみたいにきれいだった。見たことのない顔だ。どこか白い感じがする。ぼくはどうしたのかと聞き返す。ぼくに近づき、ゆっくりと、あやしい取引でもするみたいに彼はささやく。

「これからコンビニに行かない？」

この時ぼくは人生で初めて、買い食いに誘われたのだった。

結論から言えばぼくは買い食いすることにした。不思議だ。ぼくはこれまでの人生の中で決して校則に抵触しないように過ごしてきた。我が中学校では登下校中、水分補給のための買い物以外は認められていない。本当に窮屈な学校だと思う。それでも逆らったりはしなかった。なぜならそんな元気なんて無かったからだ。それでもすることにしたのは、この少年(渚というらしい)の力強い瞳に押されたのか、その白い感じが心のどこかで安心感を与えたのかは分からない。とにかくそんな色々が重なってぼくはこれをやってみようという気持ちになった。

ぼくたちは学校から続く坂道を平然と、早めに帰る先生方にばれないように歩いた。ぼくたちは自己紹介をした。それから渚は自分のことをいろいろ教えてくれた。年齢は十四歳で同い年だと言うこと、ぼくと同じ中学校に通っていること、好きな色は黒色だと言うこと、そんな感じのことを話してくれた。夕陽に照らされて暑い。じめじめして汗がふつつつと湧き出てくる。ぼくの名前も教えた。そんなこんなで二十分ぐらい歩いて麓のコンビニに着く。学校は山の上にあるので買い食いするのも一苦労だ。ドアを開けると中はクーラーで涼しくなっており、汗が風に吹かれて気持ちいい。さっそくお菓子やジュースを所持金の許す範囲で限界までカゴに詰め込む。ふと気になって渚の方を見る。何とまだ何もカゴに入れていない。お金が無いのかと聞いてみるが違うと言われた。それから渚は麦茶を一本買って会計を済ませた。変なやつだ。だけどせっかくなので、ぼくも渚と同じ麦茶を買ってみた。

コンビニの外に出ると渚が立っていた。それから二人で近くの公園まで向かう。そこは甲子園球場の四分の一ぐらいの広さで、幼稚園ぐらいの頃はよくおじいちゃんに連れて行ってもらった。適当なベンチを見つけて腰掛ける。正面の広場で子供が遊んでいるのが見える。ぼくたちは同時に蓋を開け麦茶を一気飲みした。美味い。喉越しのいい麦茶は冷たくて、暑い日には最高だ。二人で喉をぐくぐく鳴らしながら飲み干した。

「うまいな」

渚も美味しいと言った。

しばらくぼうっとしていると遠くで女の人が手を振った。

「あれ、ボクの母さんなんだ」

じゃあね、今日はありがとう、そう言って渚は母親のもとに走っていった。

それから一週間後、渚は亡くなった。ぼくがそのことを知ったのはさらに一日後のことだ。校長先生が急に朝礼をやって、全校生徒の前で話した。

「みなさんの大切な仲間が、昨日亡くされました」

川島渚、先生がそう紹介した時、ぼくは絶対にあの渚に違いないと思った。そして罪悪感を感じた。渚は重い病気でなかなか外に出られなかったそうだ。ひょっとしたらあの買い食いが渚の寿命を縮めたのかもしれない。思えば渚が持っていたあの白さはそこから来ていたのかもしれない、と思った。

朝礼の日から一週間後、憂鬱になっているぼくの元に、渚の母親から手紙が届いた。最初はビクビクしていた。ひょっとするとぼくへの恨み言が書かれているかもしれない。それでも覚悟を決めて封筒を開ける。

驚いたことに、そこには感謝の言葉が並んでいた。渚は本当にあの買い食いが楽しかったらしく、病院に帰ってからそのことについてずっと喋っていたそうだ。そしてあの時ぼくを選んだ理由も書かれていた。ずっと同じ時間に自販機でお茶を買うのを病室から見ていたらしい。ちょっと面食らった。最後には渚にとっての最高の冒険をありがとうと綺麗な字で書かれていて、ぼくはすこしだけ嬉しい気持ちになった。

渚はこの一時間弱の冒険で病室から自分の世界を広げたに違いない。それには危険もあった。それでもその道を選んだ渚はすごいやつなんだと思う。最初はこの体験はぼくにとって、日常に挟まったしおりのようなもので、特に重要なものではないと考えていた。

だけど今は違う。あの体験でぼくの世界は地図に表せないカタチで広がったのだと思う。あの一時間弱は、ぼくにとっても大冒険だった。そうに違いない。

伽藍亭

メフィストフェウレス

繁華街を抜けて、心なしか寂れてきたあたりに伽藍亭はある。

枯れ、ひなびた蔦が窓を覆い隠そうとするかのように壁を伝い、一目見ると幾年も忘れ去られて放置されていた森の小屋が突如として町中に現れたような、そんな違和感を覚えるのだが、よくよくその建物を見ると明治、大正を風靡したような和洋折衷のものであり、見てくれだけのものとは違った拘りが浮き出てくる。

昨年、大学生になったばかりの僕がこの建物に引きずり込まれるかのように入ったのを契機として、どうしようもなく暇が出来たとき僕はこの喫茶店を訪れるようにしていた。「亭」という字から料理店を連想させるが実はそうではないのだ。

町から一線を引くような形で敷かれたタイルを踏み締め、周りを拒絶するような窓の無い重い扉を開くと場違いなほど底抜けに明るい音が重苦しい店内に響き、何か不当に人の領域に侵入しているようで気まずく、自分がここにはいけない存在なのではないかとまで思ってしまうある種の威容があり、僕は心の底でそのルーツを求めるなら、それはカタコンベに違いないと密かに思った。静かな圧は精神を圧迫して、自分が徐々に開き切った扉から放されていくような錯覚を覚えさせたが、店主が巢から這い出すようにして奥から顔を出したことでその緊張も数秒の間に終わった。

「ああ、いらっしゃい。」

「どうも」

見た目の割にはしゃんとした初老の店主は親しくはしているが名前は知らなかった。恐らく知ろうと自分がしていないのだろう。親しくし過ぎると暑苦しく、そうでなさ過ぎると不信感を抱く。強いられたそれは仕方無いにしても、わざわざそれを求めに行くのは御免だ。僕はあっさり注文を終わらせると、ため息を付くように体内の熱量を吐き出した。もう九月だというのに街はうだるような暑さを内包していた。逆光気味の店内からはガラスのせいかわれとも陽炎のせいなのかは分からないが外行く人を歪ませて見せていた。

思うにこの場所は僕にとってサナトリウムのようなものなのだろう。道理という病に日々少しずつ侵されるのをあくまで気休め程度だが、この喫茶で癒すのだ。この病に完全に侵されてしまえば恐らく楽なのだろうが、そうなってしまうと自分が自分でなくなるような気がしていた。それはただ、青年期特有の空回りな反抗心によるものなのかもしれないが。

店内は僕と店主の2人きりで、閑散とした店内は哀れみを感じる程であり、窓際に何気なく置かれているペリカンらしき鳥の手彫りの木像は、日焼けの跡がそうさせるのか、何かを祈るかのように目を伏せ、佇んでいるように見えた。音としてはコーヒーを砕く音しか聞こえない店内は穏やかな時が流れる。今、正に僕は時間を潰すことが出来ているのだと思って、密かな満足感を覚えた。大人になるまでの限られた有用に使うべきはずの時間、それをこう何の気無しに浪費している自分がまるで社会に対して反旗を翻しているようで何か気分が高揚した。社会は人が忙しくなるのを強いすぎるのだ。人が本当に人として生きられるのは恐らく大学生までだろう。社会に属すれば時間というもの全て社会に捧げられ、社会から退いたとしても今度は死の気配に気を取られて満足に生きることは出来ない。人は2度死ぬ。

第一の死がもうそこまで迫っていた。僕は腕時計を外してポケットに入れた。何かそうするべきだと思った。サナトリウムで無為な時間を過ごした人々はその身を蝕む病に対して憎しみを持ったであろうが、それに報いた者はいないだろうと思って何か愉快だった。

ただそうした静かな時間は出し抜きに乱された。一人の男だ。店主と同年代らしき男が扉を開き放ったのだ。逆光でその顔はよく見ることが出来なかったが、それがつい先の自分の姿と重なって、もう一人自分が店に入ってくるような幻覚を見た気がした。

「ヤァどうも」

「いらっしやい」

店主がコーヒーカップを片手に同様の最低限の挨拶をしたが、そこには心からの親しみがこもっているようで何となく気に障った。

「オヤ珍しい。今日は客がいつもの2倍じゃあないか。君としては中々の進歩じゃないか。どうだ、人気店への目処は立ったのか？」

「いや、そんな大層なことではないですよ。彼もちよくちよくここに来ていますし。逆に巡り合わなかったのが不思議なぐらいで・・・」

急に話し始めた店主が悪戯っぽくこちらへ目くばせしてきて無性に腹が立った。その妙な親しみは僕に対し抑えてきたそれなのか、親しい客との対面に釣られたうわべだけのそれなのかは明らかでなかったが、いずれにしても僕とその客に差異をつけているのは変わらない。その客がたとえ店主の旧友であれ何であれ、その点はどうしても気に掛ったのだ。何かずれた感情で身体を満たしつつ、店主の持つ、恐らく僕の注文したコーヒーの湯気の先をながめていた。不安と一抹の焦り。店主のもつコーヒーから熱気と湯気が抜けてゆくように僕から抜けてゆく何か。それが何で、何によるものか分からなかった。

気付くとコーヒーは目の前に置かれ、それを覗き込むようにして客が僕と対面するように立っていた。ちょうど僕がその客を見上げる形である。

「少し相席させてもらえませんか。イヤ、チョット話相手になってもらいたいのです。何とかまかりませんか？」

思わず啞然とした。それは確かに癪に障るものに気を取られたいというのもあったが、それ以上にこの客の持つ特異さにあてられていたのだ。溢れんばかりの自尊心とその中に巢食うようにして存在する自嘲の気配がこの人間の年季を思わせた。例えるなら虎になった李徴か、狂気とも思えるその強烈さが判断を遅らせていた。

「・・・・・・結構です。」

ほんの束の間だったが、男の全身がひび割れ灰色へと脱色したように見えた。心の内では話を聞くつもりでそのように直接的に拒むことなども頭で考えていなかったのだが反射的にそう口に出してしまっていた。その行動が無意識のものだったとしても自分自身を一番よく知るものとしては見ずに知らずの人にこう敵意を向けるということはある話ではなかった。

どうやら僕の一言は男の繊細な部分を完全に打ち砕いたようで素振りとしては丁寧に分の非礼に対し謝り、さも何も無かったかのように別の席へ足を運んでいたが、わずかに片足を引き摺って歩いているように見えて何か哀愁を感じた。悪いことをしたのは分かっていたが、間が悪くて弁明をすることも出来ない。ただ、もし間が悪くなかったとしても実行しなかった気がした。気まずさの中、時が経つのをひたすら待った。

日はもう傾きかけ、光は勢いを失ったかのように徐々に暗くなっていた。雲が流れてきているようだった。

店内は三人の人間がいるということを思わせないほど静かで、ついさっきまでの騒がしさとは正反対だった。苛立ちは消え去ったものの何か集中する気になれずにいた。気まずさからかどうも落ち着くことが出来ず、もどかしさが心に去来した。

雲によって明滅する店内で僕は考えることを諦め、今まではあまり気のはらってこなかった伽藍亭の内側を眺めることにした。

逆光気味であった店内は普段とは違った店の一面を映していた。

軽食しか出さない喫茶にしては妙に大きすぎる厨房。床の傷み具合からして今より多くのテーブルと椅子が整然と並べられていたであろうダイニング、そして店主の左の薬指に嵌められた古びた金の指輪。

気付くのに遅すぎたのだ。僕を引きつけていたものは幻滅してしまったのだろう。ペリカンの木像の下に死んだ雛を見たような気がした。自由意志の欠損した母子像。社会と同じだ。

男はいつの間にかぶつぶつと雑音の如き言葉を吐き出していた。自分を慰めているかのように一言一言が苦しみを持っている。時折聞こえる「うき草」や「鶴」という言葉がひどく気にかかった。

そろそろ帰ろう、と何となく思い、ポケットの中の腕時計を意識した。かなりの時間が経っているのだろう。冷え切ったコーヒーストを飲み干そうとしてマグに口をつけると幽かな血の香りがした。

「女神と僕と」改め、
桜舞う日に 第二章

高坂あおい

あらすじ

突如現れた女神・エオリアを仕方なく家で匿うことになった東風景虎(こち かげとら)。話し合いの末、二人でエオリアの生活用品を買いに行くことに決めた。しかし、ドアを開けたその先に待っていたのは、幼馴染との鉢合わせという無慈悲な現実でー？

「で、この子は誰なの？ 虎くん？」

俺の眼前には健康的な生足があった。それはもう白くて美しい——

「虎くんは人の質問に答えずに、どこを見てるのかな～？」

「.....変態」

「すいませんすいません」

俺の視界いっぱいには神聖なる生足があるのは、他でもない。俺が一人正座させられているからである。

というか、エオリアに関しては俺を庇う立場であろうに。俺が言うのもなんだが、今彼女の居場所はここにしかないのだから。

「で、もうそろそろ質問に答えたら？ 正座.....辛いでしょ？」

少し身をかがませて、ポニーテールを揺らしながら俺の顔を覗き込んでくる幼馴染の視線から逃れるように、エオリアに目を向けた。

心配そうにこちらを見てくるエオリアの目を見ながら、俺はついさっきのことを思い出した。

不覚にも幼馴染の西岡夏音と鉢合わせてしまった俺だが、言葉を重ねに重ねて何とかエオリアと話し合う時間を貰うことに成功した。

そして、リビングに夏音を置き、俺とエオリアは二階にある俺の部屋で作戦会議を行うこととなった。

俺の部屋は決して狭い訳ではなく、むしろ広い方だ。

二人で向き合って座ってすぐにエオリアの口が開かれた。

「あれは誰なの？」

「あいつは俺の幼馴染の西岡夏音だよ」

「もしかしてだけど、今結構ヤバめの状況？」

「それはもう『東風景虎非常事態宣言』発令中だよ」

幼馴染が来ただけで何故こんなにも俺が危機感を覚えているのか。

彼女、西岡夏音は幼稚園の頃からの幼馴染で、小学校・中学校と生活を共にしてきた。いわば、ほぼ家族みたいなもの。だったのだが、中学校に入学したあたりから、一体何に影響されたのか、俺への依存が酷くなった。どこに行くにも何をするのにも俺と一緒に。

そして、高校生になって親が旅行に行ってから毎日のように俺の家に来ては夕飯を分けてくれたり、作ってくれたりしてくれている。

そんな彼女が関係のない女を俺が家に連れ込んでいると知ったら、何を思うだろうか。いや、何かを思う前に行動するだろう。何をするのかは怖くて言えないが。

ということのエオリアに説明した。

「どうすんのよ？ 東風を生贄として捧げる？」

「俺なら死んでもいいってか」

「ごめん……………さよなら」

「誠エンドはいやああ！」

「……冗談はこれくらいにしといて、解決策考えないと」

「そうだな。俺としても、ここで死ぬのは避けたいし。エオリアを今から外に放り出すわけにもいかないからな」

タイムリミットは刻一刻と迫って来ている。あんまりにも時間をかけすぎると、夏音が暴走し始める可能性もある。ここまで幼馴染に怯える奴なんてなかなかないだろう。

「東風の両親に電話して正式に許可を貰うというのは？」

エオリアがふと、一つの案を出してくる。しかし……

「駄目だ。時間がない。それに、絶対に許可を貰える確証がないうえに、どちらかと言えば、貰えない可能性の方が高い」

「そんなあ」

わかりやすく肩を落とすエオリア。

何か、何かないだろうか。夏音を上手く騙せて、かつ、簡単にはバレないような嘘が……

「……嘘か」

「なんて？」

「嘘をつくんだ。エオリアは俺の親族だって」

「そんな……エオリアなんて名前の日本人いないわよ？ 髪の色だって変でしょ？」

「別に日本人じゃなくていいんだよ。適当にイギリスに住んでたとか言っとけば」

エオリアは冗談を言っている時の顔とは打って変わって、真剣な顔で悩んでいる。これは、エオリアの生死にもかかわることだから、当然と言えば、当然なのだが。

数秒静かに考えた末、エオリアの出した結論は。

「いいわよ。それしか方法はないもの」

エオリアは神だから、海外の情報もいろいろ入って来ていたらしい。そして、設定は俺の言ったことに合わせるという方針で決定した。

「あ、呼び方」

「呼び方？」

「親族で、苗字呼びって変じゃないか？」

「確かに」

「俺のことは景虎って呼んでくれ」

「わかったわ。こ……景虎」

こうして俺たちの『対西岡夏音作戦会議』は終了した。

そして、時は現在へと戻る。

「……こいつは、俺の親戚だよ」

「へえ、そういう設定？」

こちらの作戦などお見通しだと言わんばかりに、即座にツッコミを入れてくる夏音。けれども、俺もここで簡単に負けるわけにはいかない。

「設定？ ああ、神様がお決めになった設定だな」

俺の嘘を見抜こうと、夏音が俺の目をじっと見つめてくる。

しかし、残念ながら俺は嘘をついていないので、俺がこんなもので動揺することはない。

正確に言えば、『神様と決めた設定』だが。

「そんな親戚私見たことも聞いたこともないよ？ 十年間も一緒にいるのに」

「そりゃそうだろう。俺だって、今日の午前中知ったんだよ。親から急に電話があつてな。なんでも、『イギリスから遠い親戚の子がそっちに行くから、セントレア（中部国際空港）まで迎えに行っておいてあげて』なんて」

「ふうん。名古屋空港って言わなかったのは評価してあげる」

顔に微笑をたたえてそう言うてくる夏音はもちろんのことながら、こちらのことを全く信用していない。

ちなみに、分からない人向けに説明しておく、「セントレア（中部国際空港）」は国際線も国内線も飛んでいるが、「名古屋空港」は国内線しか飛んでないのである。

「まあ、いいわ。ところで、その子の名前は？」

「エオリアだ」

「エアコンみたいな名前ね」

夏音が恐らく悪気は全くなく、無意識に呟いたその言葉を聞いた瞬間にエオリアの目つきが変わった気がした。が、すぐに元のエオリアに戻ってしまったので、何故かはよくわからなかった。

「エオリアちゃんは何歳なの？」

「16歳です」

今まで沈黙を貫いていたエオリアがそう答えた。

それを機に夏音は標的を俺からエオリアに変えたらしく、体の向きもエオリアと向き合うように変えた。

「エオリアちゃんはイギリスのどこら辺に住んでたの？」

「は、ハルに住んでいました」

「なんでこっちに来たの？」

「えと……日本に興味があつて……」

「へえ、イギリスに住んでいたのに、日本語ペラペラだねえ」

「……い、イギリスに居たころに毎日勉強していたから……えと……英語の方はいつの間にからっきしになっていて……」

急な質問攻めにあつて困惑しながらもなんとか質問の答えを紡いでいくエオリア。思うように攻められず、夏音は明らかに動揺している。

この隙をつけば、勝てるかもしれない！

数十回人生を歩んで一回経験できるかすらわからない、無関係の女の子と同居できるチャンスなんだ！ もちろん口には出さないけど！

心の中ではそんなことを考えつつ、俺はポーカークフェイスを装って、歯ぎしりをしていた夏音に話しかける。

「なあ、夏音。ちょっといいか？」

「な、何？ 虎くん？」

夏音にしては珍しく俺の方を見ることなく、返事を返してくる。

「何でお前はそんなにエオリアのことを知りたがるんだ？」

「え？」

俺からの質問は完全に想定外だったのだろう。夏音は俺の方へと振り返って、そのまま固まった。

俺は今のうちに精神状態を立て直すべく窓の外を見ると、さっきまで明るかった空は夕焼け色に染まって、今日という一日が終わりかけていることを俺たちに知らせてくれていた。

「.....嫌なのよ」

外から入ってきた茜色が夏音の顔を朱色に染め、暗くなった部屋をも赤く照らす。

そして、夏音から絞り出すように出された言葉はやけに大きく聞こえた気がした。

「嫌なの」

もう一度発せられた声は今度は錯覚ではなく、耳の奥まではっきりと響く。

ここで「何が？」と聞き返せたならどれほどよかっただろうか。しかし、俺もエオリアもそれを言葉にしなかった。いや、できなかった。

「わかってる。エオリアちゃんが虎くんの親戚であることはわかってるの。だって、そうじゃないとおかしいから。いきなり、赤の他人が家に押しかけてくるのなんておかしいし、その赤の他人を虎くんが嘘をついてまで庇う理由なんてない。私が理不尽にエオリアちゃんを質問攻めにしてしまったのも私が悪いの.....でもね.....でもね.....嫌なんだ。怖いんだ。このまま虎くんが私からどんどん離れて行っちゃいそう。でも、そんなわけない。根拠なんてない。これは全部私の妄想でしかない。それでも、何か嫌な予感がしちゃうんだ.....」

夏音の言った言葉が俺たちの胸を串刺しにしたから。

夏音がヤンデレの世界へと堕ちかけている気がしなくもないが、それ以上に彼女の言っていることが全体的確過ぎて、俺達の中の罪悪感だけが高まった。

その気持ちを高めるように今まで赤く輝いていた太陽は地平線の下へと沈み、俺たちはまた沈黙と闇に包まれた。

俺とエオリアの二人が何も言えずダラダラと冷や汗を垂れ流している一方で、夏音は完全に闇堕ち風に顔を暗くさせて、ただただ無言で俯いている。

生まれて初めて遭遇したこのシチュエーションを打破する案募集中！ 応募は概要欄に貼ってあるURLから！

という冗談はさておき、そろそろ本格的にこの問題を解決するために、俺が何かを言おうとしたその時だった。

「はっ！」

闇堕ち夏音は急に声をあげたかと思うと、立ち上がった。

ついに気でも触れたのかと見てみるが、彼女の顔から闇は消え去っていた。いや、闇が消えたというより、明るくなったという表現の方が正しい気がする。

「うん！ 今のはなかったことにして！」

ぱっと見さっきまでの夏音とは一転して、いつも通りの明るい夏音に戻っている。

「あ、エオリアちゃんは当分こっちにいるんだよね？」

「.....あっ！ はい！」

「これからよろしくね！ わからないことがあったら何でも聞いて！」

「よ、よろしくです……」

今まで散々俺に偉そうな態度をとっていたエオリアが敬語を使っている……だと。

どうやら、夏音の急な変わりように脳が追い付けず、混乱していると見た。

「今日夕ご飯はあそこに置いといたから。いつも通り多く作ってあるから、エオリアちゃんが居ても十分足りると思うよ」

「お、おう」

見ると、数時間前にも見た紙袋がキッチンに置かれてあった。

なぜだろう。なぜか夏音の言葉の端々に微かな棘があるように感じてしまう。

夏音はいつもよりも少し足早に玄関まで向かっていった。

俺とエオリアも夏音を見送るために無言で後ろをついていく。

「よし！ じゃあ、また明日！ おやすみ！」

靴を履き替えるなりすぐに夏音はドアを開けて勢いよく飛び出していった。

俺たちは「おやすみ」と、ただそれだけしかいうことができなかった。俺が右手を挙げたころにはドアは既に閉まっていた。

「えっとー……何とかしのぎ切ったのかしら？」

「あ、ああ……そうなるのかな？」

俺たちはさっきまでの余韻を残したまま夕飯を食べるためにリビングへと戻っていった。

しかし、俺たちはすぐに二人で暮らすことの大変さを思い知らされることとなった。

「ねえ！ なんでレモンが無いのよ！」

「ば、馬鹿野郎！ 唐揚げにレモンをかけるだあ？ 唐揚げ本来のうまみがレモンにかき消されちゃうだろうが！」

「はあ……これだから何もわかってない人間は……。いい？ レモンのあの清々しい香りとか爽やかな風味が唐揚げの味を引き立てるのよ！」

ヒートアップしてしまったエオリアが机を叩き、勢いよく立ち上がった。その衝撃で机は揺れ、カチャリという食器のぶつかり合う音が鳴る。

やはり食べ物は人を変えるらしく、エオリアの目は完全に血走っている。もっとも、エオリアは人ではなく神なのだが。

しかし、こればかりは俺も簡単に譲ることはできない。

「唐揚げには絶対塩コショウ一択だ！ ……もしや、お前」

「なによ？」

途中で言葉を切った俺を訝しむように首を傾げるエオリア。

俺はエオリアのその疑問に答えるべく、禁断の質問を口にすることにした。

「天ぷらは天つゆで食べる派か……？」

「もちろんそうよ……はっ！ まさか景虎は塩派なの？」

俺は無言という答えを返す。

もちろん、この場における無言は肯定として受け取られる。

互いに衝撃的な事実が知らされたことで、またもや黙ってしまうエオリアと俺。

俺からすれば唐揚げにレモンをかけるのは言語道断だし、天ぷらに塩を付けて食べるのは当たり前のこと。しかし、エオリアからすれば全て逆になってしまうのだ。

「話し合いが必要だな」

「話し合い？」

「ああ。二人の好みについての話し合いだ。もし、これから当分ここにいるようなら、今日みたいに一々ぶつかり合うわけにもいかないだろう」

「確かに、その通りね」

俺の提案にエオリアは快諾してくれた。が、「でも……」と彼女は続ける。

「でも、その前にご飯食べない？」

「……了解」

食いしん嬢エオリアさんにはポッ○レモンで我慢してもらった。

「風呂は……」

「私が先に入るわ」

昼食の時と同様に皿洗いを終えた俺はソファでくつろいでいたエオリアに声を掛けたのだが、返事は一瞬で返ってきた。

「あんたの入った風呂の残り湯に浸かるなんて嫌だわ」

「いや、風呂沸かしてねえから」

「馬鹿にしてるの？ そんなこと知ってるわよ」

俺のツッコミにも動じず、聞こえてくるのは俺のことを馬鹿にしたような声。

「……は？」

「ん？」

思わず真顔でエオリアの方を見ると、彼女も真顔で見返してくる。

知ってて、わざわざあんなことを言ってきたということは……。

「……お前、言ってみただけ、だなんて理由だったら許さ——」

「さ、私はさっさと入ってきますかあ」

俺が言い切るよりも早くエオリアは驚異的な速さで風呂場まで逃げていった。

走っているようには見えなかったんだが、何だあの速さは……。

無事風呂にも入り終えて、互いの食の好みも大体は把握した俺らを待っていたのは「寝所戦争」だった。

アナザー・サイド・オブ・ガールズ

ひつまぶし

あらすじ

海沿いの坂の多い街にある共学の高校、砦山高校。その文芸部の部長は二年生の楠川涼介という地味で影の薄いコミュ障気味のオタク男子である。部活説明会でもろくに喋ることができなかった彼は、自分が文芸部最後の部員だと考えていたが、二人の女子部員、明るい性格の沢井桜と隠れオタクで地味っぽい水上みずきが入部する。これは、三人体制になった文芸部が初めて部誌を出した一学期の末の話である。

七月中旬の、午前授業の日の昼下がり。適当に食事を取った砦山高校文芸部のメンバーは夏が迫りつつある部室で久方ぶりにだらだらとしていた。何とか書き上げた部誌は印刷を終え、各教室に三部ずつ置かれている。どれだけ読まれるかは分からないが、とにかく僕らは成し遂げたのだ。僕、楠川涼介部長の初めての文芸部らしい活動でもあったから、顧問が設定した締切に間に合って本当に良かった。

「どれくらい読まれるのかなあ」

「部誌のこと？」

「そうそう」

どうやら全く同じ疑問を抱いていたらしいショートカットの女の子、沢井桜さんが呟く。彼女の小説のジャンルはラブコメディ。登場人物たちの甘酸っぱい会話が強い印象を残す作品だ。荒削りだが面白い。

「分からん.....でも感想言われたことは無いよ。僕が孤立してるからかもしれないけど」

「ええ.....」

「でも楠川さん、その.....オタク仲間？みたいな方はいないんですか？」

右斜め前の定位置でお茶菓子(源氏パイだった)を食べていた三編みの子、水上みずきさんもぼやく。彼女のミステリーは伏線がとても丁寧に張られていて、それをまとめて回収する解決編の面白さが際立っていた。

「いるにはいるけど.....あいつは映画オタクで、活字はてんでダメだから読まないらしい」

「そう、ですか.....」

空気が重くなる。この話はしない方が良かったかな、と思いながら三杯目のアイステイーを飲もうと席を立ったとき、

「みんな揃ってますか～？」

顧問の海野先生が入ってきた。

「楠川せんばい、あの女の子誰？」

「どこかで見たような.....誰でしたっけ？」

「僕らの顧問だよ.....あとあの人二十七さ」

「涼介？」

「いえ、何でもないです！」

海野恵は今年二十七歳の国語の女教師(独身)で、文芸部の顧問でもある。比較的上品な物腰とその中高生にしか見えない見た目で生徒からは「海野ちゃん」と呼ばれていて、人気も高い。

だがしかし。

僕は知っている。この人の本性はそんなものじゃない。これはいつもだらだらとだらけていて、家で自堕落な生活を送っている。休日なんて朝っぱらからビールをあおってさえいる。さらに酷いことには熱烈な映画オタクで、しょっちゅう家に遊びに来ては徹夜で映画の語り合いに付き合わせるのだ。

どうして僕は彼女にここまで詳しいのかと思われるかもしれないが、それもそのはず、この人は僕の従姉なのである。大変悲しいことに。

「で、殆ど文芸部の事を放置しているダメ顧問のめぐねえが何の用？」

「楠川君、教師をそう気安く下の名前で呼ぶものではありません」

「その口調続けるならテスト勉強中に無理やりクソ映画鑑賞会に参加させ……ごふっ」

「りょ・う・す・け？」

「ごめんなさい許してください」

神速で土下座をする。ちなみに先程の「ごふっ」はめぐねえの右ストレートが僕の左肩に突き刺さった音だ。これぐらいで済むならまだ軽い方である。

「えっとですね、今回ここに來たのは……」

派手に猫を被って話を進めようとするめぐねえ。二人とも原始人を見るような目つきで見てるんだからもう諦めろよ。

「楠川せんぱい、海野ちゃんとはどんなご関係で……？」

「僕の従姉だ、大変残念なことに。ちなみに呼び名については四歳ぐらいからずっとこうだから、まあ、その、何というか……触れないでくれ」

「楠川さんも大変なんですね……」

「今度疲労回復に良さそうなもの買ってきますね、せんぱい」

「気持ちだけ貰っとくよ。つーわけでめぐねえ、素がばれてるから少なくとも部内では素で頼む。正直きも……ぐはっ！」

「うら若き乙女をきもい呼ばわりたあ、いい度胸じゃんか」

「乙女は股間に蹴りを入れねえんだよ……ってそこ！冥福を祈ろうとしない！」

「で、実際の所何しに來たんだ？」

我が物顔で椅子を一つ占領した従姉にアイスティーを渡して尋ねる。さっきも言ったが、この人は基本的に面倒くさがりなので文芸部は放置している。そんな顧問が來るとは、よほどのことがあったに違いない。

「夏の部活についてちょっと用ができた……砂糖よこせ」

「んなもんは無い。紅茶にまで砂糖入れるのやめなよ、甘いもん食いまくってんだから虫歯になるぞ」

「うーるーさーい」

誰も砂糖を使わないから置いていないって言ってるのに。踵を踏まれても出ないものは出ないんだから諦めろ。

「で、夏休みなんだが」

唐突に話を戻すめぐねえ。世話しない人である。

「合宿するぞ」

「「.....え？」」

めぐねえが言うところをまとめると、「活動実績の殆ど無い文芸部が潰されそうになっているから廃部を回避する為二泊三日の合宿を行って活動実績を作る」らしい。部誌は認知度が低すぎて実績に入っていないということだった。遺憾なんてレベルじゃない。

衝撃の事実に打ちのめされた僕を尻目に、話は具体的な計画の説明に入っていた。隣の県にある小さなコテージ(戦時中に軍の施設だったところを改修して作った、かなり古いところらしい。本土決戦でよく燃え尽きなかったものだ)を借りて、そこで合宿をするらしい。食事は自分たちで作るとのこと。僕はある程度作れるし、めぐねえも(異常に男飯っぽい)出来るので何とかなるだろう。その間、一人一編の小説を完成させることが目標だ。一応計画書でも「文芸部の文章力を上げるため」となっているらしい。それでよく申請が通ったものである。

「だってここ無くなったらあたしがもっと面倒な部活の顧問押し付けられるし」
さいですか。

だがこの企画も、部員が反対すれば潰えるかもしれない。二人を取り込んで.....

「あたしは予定大丈夫そうです！楽しそうじゃないですか！」

「私も特に予定は無いですね」

ダメそうである。それでいいのか。

「あ、そうだめぐちゃん！その場所ってどんなところなんですか？」

「めぐちゃんゆーな。場所はね.....山の中にあるんだけど、近くにはきれいな水源もあるから泳いだりも出来るっぽいな。戦前は陸軍の演習場だったから、場所もかなり広いぞ」

「いいじゃないですか！泳いじゃったりも出来ますよね!？」

「多分大丈夫ねー。ま、あたしは漫画読むけど」

いつの間にか話がどんどん進んで行く。ノリが怖い。あとわざわざそこで漫画読むなよ。

「ってことで、決定な」

「いやちょっとめぐねえ！俺の予定とか完全スルーかよ！俺が外出嫌いなもの知ってるだろ!？」

さすがにこれは突っ込まなければ。週末に男一人で女性たちと一緒に出かけるとか引きこもり体質にはきつい。

「だって涼介に決定権ないし、ついでに拒否権もねーだろ。もし拒否ったら、お前の中学時代の原稿を.....」

「ごめんなさい喜んで行きますあー楽しみだなー」

どうやら強制的に行くことになるらしい。辛い。

「そうだ、準備のために買い出し行くから来週付き合え」

「勘弁して.....」

そして八月三日金曜日、合宿当日。めぐねえが運転する車で目的のコテージまで向かう。吐きそうだ。法定速度はほぼ守っているはずなのにどうしてあんなに運転が荒れ狂うのだろう。そして、何であんなに後部座席の部員たちは元気一杯なのだろう。予め酔い止めを規定の二倍は飲んでおいたのに大変気持ち悪い。

「よーし、着いたぞ！」

「空気が美味しい！最高！」

「森の中の小さな家にきれいな川.....のどこですね」

「何でそんなに元気なん.....うっ、トイレ行って来る.....」

この始末である。早く小説書こう。そうだ、傍若無人な姉に振り回される弟のドタバタコメディなんてどうだろうか？主人公は普通の学校生活を過ごしたいのに、姉のせいで様々なひどい目に遭い続けるのだ。だがそのたびに(現実とは異なり)姉が優しさを見せるため、結局姉についていってしまう。うん、書きやすい。

コテージにはリビングの隣にキッチンと風呂、トイレ(何とか汚すことなく使えた。まだ気持ち悪い.....)がついていて、二段ベッドが2つ、寝台列車のB寝台のような配置で並んでいて、クローゼットまである。これ、コテージというより小さな別荘と言ったほうがいいんじゃないだろうか。

「昼食は食ったからいいとして.....食事を作る順どうする？」

「バーベキュー食材買ったでしょ」

何でそれを忘れてるんだ。合宿の定番だろうに。

「それじゃ、片付け終わったら小説書こう！」

「「はい！」」

さて、合宿の(名目上の)目的を果たそう。

「せんぱい、ここの表現なんですけど.....」

「そこは...今までの柔らかさを残す方がいいだろうし、平仮名で[気づいちゃった]とかの方がいいかもね」

「ミズキはどう思う？」

「えっ、その...あ、でもここはやっぱり[気付いてしまった]の方がいい気が.....」

机を囲んで沢井さんの原稿について語る。今は主人公が友人への思いに気がつくシーンの描写が議題だ。そして、これがおそらく最後の議題でもある。他の二人はもう書き終えているのだ。僕は書くのは速いし、既にしっかりとしたプロットを作っていた水上さんもかなり早く書けていた。残る沢井さんの小説もクライマックスに入っている。あと少しだ。

(それにしても)表現を考えるのとはまた別の思考回路で、僕は思った。部員みんなに明確な成長が現れている。でも、僕にはそれが感じられない。文章は一向に下手だし、ストーリーにもあまり面白みが感じられない。何より、文芸というジャンルに含めるにはいささか不真面目なものばかり書いている。読書趣味が妙な方向に傾きすぎているので、夏休み中に何冊か文学的な作品を読まなければ。

いや、そもそも僕はここに居るべき人間だろうか？僕がいなければ、彼女たちも気兼ねなく色々なことが出来るだろうし、むしろ迷惑な存在にはなっていないだろうか。僕はどこにでもいるただのオタクで陰キャな高校生。こんないかにも青春なイベントよりももっと似合う場所があるし、そっちに行く方が彼女たちにとってプラスではないのか。

「こーゆーところって漢字は使ったほうがいいんですか？せんぱーい？」

「ん？あ、ごめん。えっと、ここの漢字はどうかってはな.....って水上さん近い近い！」

沢井さんの疑問に答えようと頭を動かしていると、いきなり水上さんが顔を覗き込んできた。心臓のBPMが百九十ぐらいまではね上がって、彼女の不安げな顔が小刻みに揺れる。

「何だか、今日の楠川さんちょっと変です」

「.....変？そんなに？」

「はい。何かありました？見た感じ熱とかは大丈夫ですけど.....」

「いや、思い当たる節は特に無いな。さて、続きを始めよう」

「？はい.....」

水上さんの疑問を半ば無理やりスルーする。皆に心配をかけたくない。普段どおり、普段どおり。

「ここは、うん、漢字は使わないほうがいいと思う。それよりもちっと気になるのが.....」

「それなら.....こっちの方が良いってこと？」

「いい、というよりはストーリーに違和感が出ない、かな。今のままだとちょっと解釈に無理がかかるから.....」

「じゃ、ここを書き換えて、っと.....終わったあ！」

「水辺行こう水辺！」

時計を見る。十五時半。まだまだ泳げる時間だ。

「あー.....僕は泳げないから、釣りしてるよ。多分この時間なら、一人一匹分ぐらいの魚はかかるから」

「了解で一す。どうせなら一人三十匹ぐらい、お願いしまーす」

「いやそこまでは厳しいと思うけど.....」

どうやって食べるつもりだ。

二人が着替えにバスルームに行ったのを見送って、僕は自分の釣具を準備すると、

「めぐねえどうすんだ？行くか？」

「あたしは漫画読むって大事な仕事があるから無理だ！」

「おい文芸部顧問」

一応めぐねえに声をかけて、良さそうなポイントを探しに出た。

一時間後。

「うっそだろおい」

比較的安全そうなポイントを見つけ、そこに腰を下ろしてからだいたい四十五分。傍らに置いたバケツには、十匹近い魚が入っていた。ここ、めちゃくちゃ釣れる。自分の運の良さを信じてもない神様に感謝した。

「君らもっと広がったらどうなの.....あ、またかかった」

しなる釣り竿を手前に寄せ、釣り糸をそっとたぐり寄せる。また釣れた。これもイワナだろう。

「こんなに要らないしリリースするか」

じたばたと暴れ回るイワナの口から針を外し、優しく川に戻す。そろそろ釣り竿も上げておこう。さらにバッグからアルコールランプとコーヒー豆、携帯式のコーヒーミルにフィルターも出す。もちろんコップも。

まず川から水をすくい、アルコールランプで加熱する。お湯になって沸くまでの間、コーヒーミルにコーヒー豆を入れて粉にする。粉にしたら、フィルターに入れて沸くのを待つ。ゆらゆらと立ち上がるアルコールランプの炎と、陽炎の向こう側で揺らめく世界。とても穏やかな気持ちになる。やはり、僕は一人でいる時間のほうが好きなのだ。

沸いたお湯をフィルターに通し、コーヒーにする。とても美味しい。蝉時雨の中でも日陰だと比較的涼しいので、ホットコーヒーでも美味しく感じられる。そもそもホットコーヒーのほうが好きというのもあるとは思うが。

川のせせらぎ。蝉時雨。時折聞こえる鳥の鳴き声。ああ、幸せだ。

「...さん？」

このコテージ、いいな。今度は一人でソロキャンプでしよう。

「楠川さん？」

肩をぽんぽんと叩かれて我に返る。振り向くと、心配げな顔をした水上さんがそこに立っていた。いつの間にか水着から着替えている。見てないけど。

「へあっ!?いいいいいつからそこに!？」

「コーヒー飲んですごく幸せそうな表情してたぐらいからですけど.....どれぐらい釣れました？」

「あ、ああ。かなり釣れたよ」

バケツを渡して言う。完全に視界に入っていなかった.....。気をつけなければ。

「あ、その...私も、コーヒー貰っていいですか？」

「ん、いいよ」

「それで、どうだった？」

コーヒーをもう二杯淹れて、二人で向き合って飲む。

「たまに泳ぐのっていいですねえ。気持ちよかったですよ」

「そりゃよかった」

「.....」

「.....」

会話が續かない。僕と文芸部員の二人とは、特に仲が良いわけでもないから仕方がないとも言えるが、大変居心地が悪い。いつもなら小説という媒体を通してなんとか会話をすることが出来るが、そもそも僕は人と会話するのが苦手だ。

「あの、楠川さん」

先に口を開いたのは、水上さんだった。

「やっぱり、迷惑でしたか.....？」

「いや、そんなことは無いよ！」

大声で否定する。迷惑だなんてとんでもない。

「この夏、もしこの合宿がなかったらどこかに行く予定もなかったし、こんなところ知ることなかった！みんなで来れて嬉しかった！そう思わせてたら本当にごめん！」

「ふえっ？え、いや、その.....あの、ごめんなさい、私も勘違いしちゃって.....」

「むしろ僕が謝りたいぐらいだよ！わざわざ僕みたいな変な人間と週末を過ごすことになって本当にごめん！」

「え？いや、その...私は、こういうの、好きですし、楠川さんと一緒に、その、.....良かったな、って.....」

「.....え？」

「.....え？」

「.....はは」

「.....ふふふ」

お互いの勘違いに気付いて、自然と笑みがこぼれる。小説でしか見たことのないようなすれ違いだった。もう笑うしか無い。

「そうだ、海野ちゃんがそろそろ来いって」

「バーベキューか。急いで戻ろう」

気づけば十七時を周っていた。急いで片付けをして、コテージに戻るべく立ったそのとき。

「うわっ」

「きゃっ」

河原の石に足を取られて転んだ。水上さんまで巻き込んで、押し倒したような格好で倒れ込んでしまう。何とか顔どうしがぶつかることは避けたが、至近距離にある水上さんの整った顔が、タコを茹でたように紅く染まる。

「あ、あの、く、楠川さん、じゃなくて、楠川先輩、そっ、そによっ、こんにやとところで、あう、にやにをっ」

「ごごごごめん！本当にごめん！うんもう思う存分やっちゃっていいからビンタでもバルスでも蒸気抜きでもなんでもいいからとにかく思う存分グサッとゴスっと」

「べべべべ別に、その、私、嫌って訳じゃ、あの、でも、その、ちょっと、もっとその、うう」

「いやいやいや遠慮しないでいいからここでミンチにしてもいいから」

「それ楠川さんが死んじゃうじゃないですかあっ！事故なんだから無かったことにしてくださいよお！それに……」

「それに？」

「……そ、そんなにやに嫌じゃ……もういいですっ！帰りますよ！」

「いやちょっと速い速い！置いてかないで！」

顔を真っ赤にして足早に逃げていく水上さん。その後ろ姿を大慌てで追いながら、(さっきの水上さん、可愛かったな)などと不埒な事を考えてしまう自分がいた。

なお、この後戻った僕らはバーベキューの間中めぐねえと沢井さんに質問攻めにされ、さらに酔っためぐねえに「なんれそこで襲わなかったんだこのいくじなし～」と絡まれながらヘッドロックを極められる事になったが、それはまた別の機会に話そう。今日は色々と疲れた。

二日目。朝ご飯(僕が作った焼き魚定食みたいなやつ。意外と評価が高かった)を食べてからは、特にすることもなくだらだらと過ごした。カードゲーム(もう二度と大富豪はやるまい。何度やってもめぐねえに革命を起こされるのだから)をしたり、お菓子作り(意外なことに、沢井さんがかなり得意だった。あとめぐねえの作ったものは一種の凶器になり得る。二度とお菓子作りするな)をして、ついでに紅茶の淹れ方講座(無論めぐねえは……もう何も言うまい)をやったり。沢井さんの昼ご飯(冷やし中華らしい。ただ具材から見るとどう見ても冷やしちゃんぽんだったのはなぜだろう)や水上さんの夕ご飯(異常にクオリティーの高いお好み焼きだった。親戚がお好み焼き屋をやっているらしく、そこで学んだとのこと)を堪能して、リビングでのんびりして一日が終わる。そのはずだった。

「楠川さん、肝試ししません？」

水上さんがこんなことを言い出さなければ。

「肝試し？」

「そうですよ！夏といえば肝試し、肝試しといえば夏！やらない理由がないですよ！」

「お、おう……いや言うほどか？」

他にもいっぱいあるだろう。花火とか夏祭りとか屋台とかガンガンに冷房の効いた部屋でのごろごろライフとか。

「言うほどです！折角だから行きましょうよ！」

「何か、君も沢井さんに似てきたね……」

ハイテンション女子が二人になってしまった。正直ノリが怖い。

「せんぱい、その……あたしはパスでお願いします……」

「さくらちゃん怖がりだもんね？うんうん、いつも暗いところ歩くとき私の手握ってるもんねー」

「にゃっ!?ちょっとミズキ、ハズいことせんぱいの前で言わないでよ！」

「えー、どうしよー？」

「まあもう涼介は聞いちまった訳だがな！沢井の秘密はばれちまったってことよ、ハハハ！」

「にゃあああああああああああああ！」

自分の秘密をばらされて悶絶する沢井さん。つーかめぐねえは煽るなよ。人の心が無いのか。

「こ、こうなったら意地でも行ってやるんだから！兵士の幽霊なんていないもん！」

ふるふると生まれたての子鹿のように震えながら、沢井さんが涙目で叫ぶ。それを聞いた水上さんの顔に、一瞬だけ「にやあ」としか表現できないような笑みが浮かんでいたのを僕は見逃さなかった。

引っ込み思案に見えて意外と水上さん、強キャラかもしれない……。あとマジでそんな不穏なこと言うなよ。ここ、本土決戦の激戦地の近くだぞ。

コースは既に水上さんが選んでいたもので、すぐに出発となった。随分楽しみにしていたらしい。

「えっと、このコテージのあるエリアを一周する形で遊歩道が通ってるんです。そこを三人で回りたいと思います。ここは自転車も禁止みたいなので、事故とかは大丈夫そうですね」

木製の橋を渡った先で地図を見せながら、楽しそうに説明する。一周は一キロメートルぐらいだろうか？これなら、さほど長くはかからなさそうだ。

「三人でいっしょに行動して、一番悲鳴を上げてた人に罰ゲームしてもらいます！」

「それ絶対あたしがするじゃん！やだよそんなの！」

「あれれ？幽霊なんていないんじゃないの？」

「ミズキひどい！せんぱい何とかしてくださいよお！」

弄ばれている沢井さんが、涙目でこちらに救いを求める。その顔は救いを求めている。ならば、成すべきことは唯一つ。僕は遊歩道の脇の林の向こう側にさっと目を向けて言う。

「ん？さっきあそこに何かいなかった？」

「いやあああああああああああああ！」

そう、さらに怖がらせるのだ！

「ゆ、ゆ、ゆ、ゆーれい……こわい……」

「いや冗談だったんだけど……ごめんって」

「ええ…嘘だったんですか……見たかったのに」

「せんぱいのバカ……そんなことしないって思ってたのに……」

頬をふくらませる。何かハムスターみたいだな。それと水上さん、普通は残念がるものじゃないんだよ。

「楠川さん、行きましょう。蚊に刺されちゃいます」

「理由そこかよ！」

沢井さんと僕とで、ツッコミが完璧にシンクロする。珍しい。

「……あの」

行こうとすると、沢井さんが服の袖口を掴んできた。こけそうになった体を立て直して向き直ると、懐中電灯の光から顔をそらしたまま震えている。

「えっと、その……あ、あたしと、……」

「？」

「あ、あのっ、はにゃれないように、て、手を繋いでくださいっ！」

怖がり過ぎて立てなくなったのだろうか。恥ずかしさからか顔を真っ赤にしている。

「ん、はい」

右手に持った懐中電灯を下に向け、左手を差し出す。沢井さんの右手は壊れかけの洗濯機みたいに震えていて、怖がらせすぎたかな、と少し後悔する。

「何だか、ちょっとだけ落ち着きました……もう怖がらせないで下さいよ？約束ですからね！」

「あはは、さすがにしないよ……」

それがだいたい十分前の出来事である。本来ならそろそろ戻っているはずの僕らは、

「えっと……地図ではこっちだから……」

「そう言ってどンドン山の中に入ってるんだけど？」

何故か道に迷っていた。

「あはは……今どこなんでしょうね」

「いや現実逃避されても」

苦笑を浮かべる水上さんに真顔で返す。そう、彼女、超がつく方向音痴だったのだ。地図持って歩いて何であんな迷い方をするんだろう。道に迷う超能力でもあるんだろうか。

「とりあえず、川を目指そう。川沿いを歩けば橋の方まで着けるはずだから」

「せんぱい、でもどうやってやるんですか？水の匂いを嗅ぐとか？」

水の匂いて。僕の鼻に期待をかけすぎだろ。

「そうじゃなくって、音を聞くんた。川のせせらぎを聞いて、そっちに向かって歩く……こっちかな」

相変わらず繋いだままの手を引っ張って、右側へ向かう。踏み分けられた跡があるので、獣道かもしれない。そうなると遭遇が怖い。最悪僕が引き付けられればいいか。

しばらく歩くと、

「「あ！」」」

川に出た。やっぱりこの手に限る。

「で、ここからどうするんですか？上流に行くのか、それとも下流か」

「え」

水上さんの思わぬ疑問にたじろぐ。しまった、考えていなかった。

「まあ、多分何とかなるよ」

「せんぱいも同じじゃないですかあっ！」

結局、「左に一度曲がったのだから、また左に曲がればさきほどと逆に行くことになるはず」ということで左になった。

川沿いに歩いて三分ほど。舗装された道路に出た。

「あの、楠川さん、ここってもしかして……」

「うん。多分行くときに通った道だね」

そう、何とかあったのだ。記憶が正しければ、この先にあるトンネルを通過するとすぐに橋(スタート地点とはまた別の、コンクリート製の橋である)があり、そこを渡った先の角で右に曲がってコテージがある。本当に良かった。

「うわあああああん！くじゅがわしえんぱいい〜〜〜〜！もう死ぬっておぼいまじたよお〜〜！」

号泣しながら抱きついてくる沢井さん。そっと抱き締め返す。よほど怖かっただろうから、しばらくはそのままでいいだろう。

そう思ったときだった。

「……から我々は……にむか……こ……げきめ……」

ひび割れたような声。聞こえるはずの無い、大量のディーゼルエンジンの音。咄嗟に、音のした方に目を向ける。

「……ってわ……ゆうせいを……」

ぼんやりとしか見えないが、人のようななにかがずらりと並んでいる。その奥にあるのは……車高の高い戦車のようなもの。エンジンの唸りを上げているように見える。二人も気づいたのか、声一つ上げずに同じものを見ている。

「……いさつ……しょうた……んしゃだいさ……ぐっ」

前に立っていた男のその上空で何かが炸裂したような光が見え、その直後彼らがもがき出す。彼らの服には見覚えがあった。

戦争映画にハマっていた数年前の夏、何度も何度も画面で見たあの服装。

日本帝国陸軍の兵士たち、その幽霊が、そこにいた。

「ほんとに……いたんだ……」

最初に口を開いたのは沢井さんだった。思ったより落ち着いている。

「地名に聞き覚えがあったから調べてきたんだけど、ここ、天衝橋(てんしょうばし)の虐殺が起きた場所らしい」

「なんですかそれ…?」

「本土決戦中の千九百四十六年二月、この山に陣取った日本軍の部隊に向けて、米軍機が毒ガスを散布した事件だ。敗戦後の混乱とかもあってこの事件はほとんど知られず、数年前ようやく米軍の仕業であることが判明したんだけど、それまでこの事件は忘れ去られるか、日本軍が毒ガスで集団自決したって思われていて、それが映画にもなったぐらいだ」

天衝橋と言う映画だ、と心で付け加える。確かこの映画がきっかけで再調査が行われたんだっけか。あ。そういえば、僕もかなり落ち着いている。知識を持っているからだろうか。

「さぞ無念でしょうね.....国を守ることもできず、自分がどう死んだかも分からないまま半世紀近くも忘れられるなんて」

「そっとしておくべき、だろうな.....どうか安らかに」

帰ろう、と言いかけて右手を掴まれる。振り向くと、水上さんが向こうを見ている。手が震えている。

「あの、幽霊.....こっちに来てません.....？」

「どどどどうしましょうわたしちょっとこここういうのには」

「いや俺も知らないから俺に聞かれても」

「うっ.....うええええええええええん！お兄ちゃんたしゅけてえええええ！」

一目散に逃げ出.....せなかった。金縛りにあったのか、全く動けない。その間にもどんどん近づいてくる。輪郭のぼんやりした兵士がこちらに向かってゆっくりと歩いてきていた。身長は百六十センチ、見た目は十代後半から二十代前半といったところか。これまたおぼろげではあるが、小銃を銃口を上にした状態で持っていた。あ、と言うことは.....

「多分あの幽霊、て、敵意は無いんじゃないか？ほら、銃口を向けてないし」

「.....ふえ？お兄ちゃん、ほんと？」

「俺は信じる。軍隊の存在意義を彼が覚えていることに賭ける、というか多分それしかない」

どうか、彼が覚えてくれていますように。軍隊は、祖国と国民を守るためのものということ。あと沢井さん、痛いからそろそろ放してくれないだろうか。少なくとも僕は君のお兄ちゃんではない。

幽霊は僕たちの目の前でかがみ込むと、水上さんの方を見た。ぼろぼろのヘルメットの下顔が、穏やかな笑みを浮かべている(ように見える)。

突然、脳の中に声が流れた。年齢相応の若い声だった。

「会いに来てくれたんだね、みずきちゃん」

「な、な、何で私の名前を.....？」

「何でって、君は僕の甥孫だろう」

「「え？」」

「ん？弟...水上悟から聞いてないかい？水上清という兄がいたって話」

「おじいさまの.....お兄さん？あっ.....！」

「思い出してくれたか、良かった。怖がらせてごめんね」

どうやら助かった.....らしい。体の力が抜ける。アスファルトの温もりが心地よかった。

話をまとめると、

「今日の前にいる幽霊は、水上さんの祖父の兄であり、本土決戦直前に動員されて天衝橋の虐殺のなかで戦死した水上清さん(二十一歳)という人物で、水上さんが来ていることに気付いて幽霊として会いに来た。彼以外の幽霊たちは、この人に引きずられて顕現したのであり、皆僕らに危害を加えることはない」

ということだった。実際話してみると、なかなか気さくな人である。正直言って意外だった。この世に恨みを持っていて、現れた人間を片っ端から襲うようなものだと思っていたから。

その考えを読み取ったのか、清さんが苦笑を浮かべつつ言った。そういえばこの笑い顔も、どこことなく水上さんに似ている。

「そんな幽霊はそうそういないよ。そもそも僕らは軍人として死んだから、少なくとも自国民を殺すようなことは出来ないんだ」

「そうなんですか.....そうとは知らず逃げてしまっでごめんなさい」

「いやいや、至って普通の反応だよ。むしろあの状況で気付くなんてそうそう出来ることじゃない。みずきちゃんの彼氏に相応しい好青年じゃないか」

「にやっ.....!?も、もうっ、清おじさんってばあ！」

「か、か、彼氏だなんて.....そんなの畏れ多くて.....」

「遠慮するな遠慮するな！」

ただ、こうやっていじってくるところは沢井さんっぽい。そういう関係じゃないっけーに。

一頻り話したあと、「そろそろ遅いから」という身も蓋もない理由で別れた。最後は寂しそうな、それでも晴れやかな顔をしていたあたり、生きていれば優しい大叔父さんとして水上さんをおかわりがっていたことだろう。

「祖父から聞いてたはずなのに、私、ずっと忘れてて.....」

「仕方ないよ。幽霊とはいえ、ああして会えたんだから良かったじゃないか」

「...そうですね」

懐中電灯で照らしながら、街灯一つない道を歩く。さっきから顔が赤い。あんなこと言われたら当然っちゃ当然か。

「むー」

「え、えっと、沢井さん？」

「何でもないですよーだ」

そして先程から沢井さんの機嫌が悪い。どこかで地雷を踏んだのだろうか。

「楠川さんも天然ですよーね.....」

「そんなことは無いと思うけど...ねえ」

「そういうところですよ」

何故か怒られた。何をしたんだろう。

こんな会話をしながらコテージに戻った僕を待っていたのは、

「りょ〜う〜す〜け〜！」

「いやこれには事情があって話せば分かるからほら落ち着いてそのどこから出したか分かんないサブマシンガンとかとりあえず置いて僕の話の聞けってぎゃあああああああああ！」

「この変態がああああああああああ！問答無用じゃおらあああああああ！」

「何もやってねえよ！っていだだだだだだだだ！」

何か盛大に勘違いしたためぐねえの理不尽極まる暴行であった。こういうことになるのかよ、と抗議しかけたところで意識が吹っ飛び、そのまま僕の合宿は幕を閉じたのだった。

動く自由

クロンショー

1

ある晴れた昼下がり。その学校の西校舎の三階にて、授業が行われていた。

試験も終わり、校内にはだらけきった表情が増え、弛緩しきった空気が蔓延していた。毎年怠惰が支配するこの期間に、その教師はこの時間を設けることに決めた。

彼が抱いていた教育への熱意が衰えてもこの時間だけは毎年欠かさず取っている。そうすることが彼にとっての、教師の意義を自分で確認しようという行為の一つなのかもしれない。

いくつか壇上にて話をした後、慣れた手つきで彼は機械類を操作し、スクリーンをゆっくりと下ろした。その際生徒たちの方を見ると、真面目に話をきえている者、早くも床に突っ伏している者、明らかに他教科の教材を開いている者、机の下で何やら怪しげな動きをしている者と様々だった。例年通り。強いて言うなら少しだけ俯いているものが多い程度だろうか。それも誤差程度だった。

あらかじめ生徒たちには何を流すのかは伝えておいた。何人がそれについて記したプリントを読み込んだのかは定かではない。どちらにせよ見ることが大事だと、どこか強固な意地のようなものが囁く。ふと思った。今このようなことをする必要があるのかと。あの悪夢のような時代はとうの昔に終わったし、ここにいる子達は何も知らないだろう。本当に陰鬱とした時代を思い起こさせることをしていいのか、と。答えはあるはずもない。

準備が完了し部屋の照明を消す。瞬間、スクリーンに光が落ちる。『自由の存在』と、簡易なフォントで映し出され、それと同時に、勇ましい音楽が流れ始める。その音量に驚いたのか何人かの生徒が跳ね起きた。スクリーンは一度暗転し、ナレーションと共に白黒の映像が流れ始めた。

一人の青年が拳を固めているところから映像は始まった。互いで互いを監視し合う社会において、言論の自由を取り戻そうと、仲間語り、勇ましい音楽と共に最初の場面は終了した。再び暗転し今度は、どこかの街角にて青年が弁を奮っている様子が描かれる。内容は今の世となってはありきたりなものだが、劇中ではある種の特効薬のように街中の人々に自由への渴望を与える。再び暗転。打って変わって今度は暗い牢獄で青年が捕らえられた状態から始まる。そのまま捕まったままだが、街には自由への欲求が広まっており、支配者を打ち倒していく。一種の濁流となったそれは、もはや誰にも止められずようやく空気に幸福が満ちる。荘厳なナレーションが締めて、その映像は終了した。

僅か30分。映画というには少し短すぎるこの作品について、果たして生徒たちにどのような影響を与えるのか、その教師には今更ながらあまり理解できなかった。授業前に課したこの映像に対する感想文も、何人が真面目に本心を書くのか怪しいものだ。そもそも作中で頻繁に述べられた自由については既に今ここにあるに違いない。毎度お馴染みの自問自答を経て、挨拶の後、片付けに入る。毎年、義務感のようなものから続けていたこの恒例行事もやめた方がいいかもしれない、そう考えたときだった。教室の入り口付近で生徒が立ち止まり先程の青年のポーズを真似て何やら話していた。当然ながらその顔には青年のような覚悟がない、あるはずもない。

何気なしのそれが教師に衝撃を与えた。

元来自由とは、人が人ですらなかった頃から存在した。いわば何のしがらみのないただ一つの生命としての自由は現代の何よりも軽く、何よりも広い。やがてそれは集団に属するようになって変化していく。家族から村、村から郡、郡から国へと拡大するにつれ自由も変化する。

自由の定義は往々にして異なる。十九世紀の奴隷の自由と戦時中の日本のそれとでは、異なる性質を持っていることは考えるまでもない。いわば自由とは人が最も欲するものであり、最も手に入れられないものであるとも考えられる。

だがこれらには共通点がある。彼らはそれを激しく欲しているという点だ。そしてその渴望具合によって自由はその姿を明らかにする。

要は自由についてある集団において、同じ認識を持てば持つほど、自由は正体を表す。逆にいうと、今この瞬間自由について語っている自分達は、自由の外からは程遠い存在であり、議論する、できるということ自体がより多くの自由を所持していることの裏付けではないのか。例えば先ほどの生徒。彼らは過去に生きた先人達を感じた、自由を感じることはないだろう。冗談めかして、あるいは本気で自由を欲していたとしても自由について定義している時点で嘘であり、真の自由からはかけ離れたものではないのか。自由とは何かを考えることが一番自由ではないか。

そこまで考えたとき、その教師の胸中には不快な、それでいて少し心地いい感情が漂っていた。ひとしきり片付けを終えた後、彼は窓の外を見た。暗雲に覆われた空の向こうには、当然太陽がある。一人の生徒が出した感想文を見ながら思う。我々はとんでもなく自由であると。

カップ麺3個分の特撮のようななにか E P 2

二荒 洋介

前回のあらすじ！

鷹羽二乃と遠摩憐は、「オルタ」という怪物と戦っていた！倒したと思ったその矢先！憐はオルタと融合してしまった！

以上！説明終わり！

□□□□□□□□

「貴様、早く飯を寄越すがいい。腹が空いて辛抱ならん」

「何でお前がここに居るんだよ！」

「早く持ってこなければ暴れるぞ？」

憐(オルタ)が家に居座り始めて早一日経った日曜日の昼下り。

彼女はとくにこれといった様子も見せずに家でくつろいでいた。具体的には横になって漫画を読んだり、寝ながらスナック菓子を食べたり、昼寝したり……寝てばっかだな。とてもあの怪物とは思えない。

ようやく起き上がったと思えばこれである。

俺は、仕方なくオムレツを作り、彼女に持っていった。

「この黄色いのは何じゃ？」

「オムレツだ」

「おむれつ、か。ひとまず食べてみるかの。ほれ」

俺にスプーンを突き出してきた"憐"。

「どうした？」

「食べさせるがよい。我は今、『まんが』を読むので忙しいのじゃ。あーん、するのじゃ」

「どこで覚えた、そんな言葉」

「早く」

「わかったよ、まったく……」

スプーンでオムレツを一口サイズにすくい、彼女の口へ持っていく。

「ほら、あーん」

「あーん、んぐんぐ」

一瞬、目がきらりと光った気がした。

「な、なんじゃ、これは！？このあつあつでふわふわでとろとろの食い物は！？」

「だから、オムレツだって」

「美味いぞ！貴様、なかなかの奴じゃな！さあ、もっと寄越せ、早く！」

「はいはい」

すくっては持っていく、すくっては持っていくを繰り返しているうちに、腕が追いつかなくなっていく。

「あーっもどかしい！もう良い、自分で食べるのじゃ！」

漫画が放り出され、スプーンが取られる。

あっけにとられていると、いつの間にかオムレツは消えていた。そこそこの量是用意していたはずなんだが。彼女を見ると、口がリスみたいになっていた。消えるまでに1分もかかってないと思う。

「これで満足か」

「んぐんぐんぐ……まあ、褒めてやるかの」

幸せそうに口を拭う"憐"。やはり、あの怪物とは思えない。どう見ても普通の、どこにでもいる少女だ。どこか気は抜けてるけど。

「なあ、一体お前って何なんだ？」

ふと、そんな考えが頭をよぎり、尋ねてみる。

「さあ？」

返ってきたのはそんな気の抜けた答え。

"憐"は続けた。

「我が聞きたいぐらいじゃ。気付いたら街が壊れている上に、身体が動かないんじゃないぞ。さらにこの娘が襲って来る……こう考えてしまうのも仕方のないことだと思うのじゃが」

「暴れていたのはお前の意思ではない、そう言いたいのか？」

「誰がそんな事好きこのんでやるんじゃよ」

「確かにそれもそうだな」

"憐"は漫画を本棚から取り出し、読み始めた。さっき放り投げた漫画を片付けてからにしろよ。

暴走していたと来たか。身体の制御も効かず目の前で破壊されていく街や人々……うわ、何の拷問だよ、これ。頭がおかしくならなかっただけすごいな。

そういえば、と"憐"が漫画に顔を向けたまま言った。

「さっきから、この娘の声が頭の中で響いて耐えきれんのじゃが、どうすればいいかの」

「この娘って誰だよ」

"憐"は彼女自身を指さした。やはり、顔は漫画に向けたまま。

「ということは……憐か？」

「そうだと言っておる。貴様は馬鹿か」

お前だけには馬鹿と言われたくない、と思ったが面倒なことになりそうなので、喉元でぐっところえる。だいたい、"憐"のほうが馬鹿っぽい事をしていると思うんだけど。

「何て言っているんだ？」

「こ、これを言うのか？正気か？我には恥ずかしくて言えんわ！」

漫画を置いて叫ぶ"憐"。

「一体何を言っているんだよ！」

「言わなくちゃだめなのか？」

「ああ」

「どうしてもか？」

「まあ、そうしてくれるとありがたいな」

一瞬困った顔になり、顔を赤くして、うーうーと頭をがしがしとかき、しばらく目を閉じ、そしてまた開いて口にした。

「『ああ、二乃！その場所代わってよ！目の前に天然のじゃろり、しかも人外がいるのにぴー(自己規制)しないなんてどうかしてるよ！ああ、ぴー(自己規制)したいぴー(自

己規制)したい°-(自己規制)したい°-(自己規制)したい.....』だそうじゃ.....

あうう」

最後の方は小さくてほとんど聞き取れなかったが、うん、これは言いたくないな。ほとんどピー音で言うべき言葉じゃないか。涙目になってるし。一応謝っておくか。

「ごめんな」

「謝って済まされると思っておるのか?! 我にこんな.....こんな思いをさせておいて! 覚えておるのじゃぞ! うーっ!」

なんか、小動物みたいに威嚇してくる。かわいい。少なくとも憐よりもかわいい。.....うわ、噛みついてきた。いて、いててて!

数分格闘した後、ようやく放してくれた。あ、やべ、歯型がくっきりと付いてる。血もにじんでの。

「許したわけじゃないのじゃぞ!うう、まだ声がするのじゃ」

声がするという事は、まだ憐の意識が残っているということか。俺の時と同じような感じだな。しかし、一体化してから一日も経っているのにもとに戻らないのはなぜだろうか。

そんな謎を残して時間は過ぎていくのだった。

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

晩飯にはカレーを作った。食べる際、"憐"が「カレーはかれえの、カレーだけに」と寒い事をつぶやいていた。本人はそんなつもりで言ったわけではないらしい。

"憐"が風呂に行った。これでようやく落ち着ける.....と思ったら戻ってきた。裸で。堂々と、裸で。

「おい、仮にも女だろ、身体ぐらい隠せよ」

「あ、忘れてた.....というか、貴様はこの娘の裸を見ても何も思わんのか?」

「元があんな奴だからな。欲情のしようがない」

あんな.....変態だし。

「確かにそうじゃな」

「で、どうした? なんかあったのか?」

「.....き、貴様に風呂の使い方を教える権利をやろう」

俺の質問に対し、小さな声で答える"憐"。よく聞き取れなかった。

「もう一回言ってくれる?」

「だから、風呂の使い方を教えろって言ってるんじゃよ!」

「は?」

意味が分からない。蛇口をひねってシャワーを浴びて、身体洗ってそのまま風呂に浸かるだけじゃないのか?

「どのボタン押しても水が出てこないんじゃよ.....」

「ボタンって何の?」

「だからボタンじゃよ、ボタン!」

「いったい何なんだよ」

"憐"は俺の手を引っ張り、とてとてと歩いて風呂場まで連れて行った。そして、壁に取り付けられていた給湯器のリモコンを指さして、

「これじゃよ」

「これ給湯器のやつなんだけど」

「きゅーとーき？何じゃそれは」

「その名の通り、お湯を給するやつだよ。風呂に水をはるときにつかうやつ」

まあ、ボタンの表記も少しかすれてきているから間違えても仕方.....仕方ないのか？そこに蛇口あるだろ。普通、蛇口使うだろ。

俺は風呂の使い方を教えてやった。風呂なんて教えられなくても使えると思うんだが。

「よし、ついでだ。我の身体を洗うがよい」

「は？1人で洗えよ。というかお前の身体じゃないだろ。よし、じゃねえんだよ」

「いいじゃろ、あーらーえ！」

「お前、子どもじゃないだろ。1人でできるよな？」

「オルタに大人も子どももないわ！」

「だからどうした」

「貴様、我に恥をかかせたの忘れたわけじゃないじゃろ？囓むぞ？ん、いいのか？」

「く、卑怯な！」

「オルタじゃからの」

「いや、それは関係ないだろ」

結局、俺は"憐"の身体を洗うことになった。決して俺は変態ではない。誰があんな変態に欲情するんだよ。

一応俺も服を脱いだ。もう、そのまま風呂に入ってしまうおう。

わしゃわしゃわしゃと"憐"の髪を洗っていく。わしゃわしゃわしゃ.....

「あっ、そこじゃ。そこをもうちょっとかくのじゃ」

「知るか。俺はマッサージ屋じゃないからな」

「器の小さいやつじゃな」

「お前が横暴すぎるんだよ！」

泡立ったシャンプーをシャワーで流していく。"憐"が「目にはいる！目に入る！」とか言っているが、知ったことではない。

次は身体だ。べつにやましい気持ちはない。ええ、無いですとも。逆に、憐に対してそんな心を持つこと自体が間違えていると思う。というか、持てるか？俺は持てないね。世間の女性たちを冒涇しないためにも。

「ほ、ほら、触ってもいいんじゃないぞ？」

「誰が触るかよ！一度でもやってみろ、後で憐がなんかしてくるに決まってる！」

「それは.....ご愁傷様」

俺は比較的速やかに"憐"の身体を洗い、シャワーで流した。そして、"憐"を風呂の中に放り込んで、俺も身体を洗い始めた。

ごしごしごしと髪を洗い、同じように、ごしごしごしと身体を洗う。

身体を洗い終えた俺は風呂へとダイブした。え、既に"憐"が居るって？"憐"に対して.....(以下略)

「そういえば、お前って何て呼べばいいんだ？」

「いままで貴様は我の事を何と呼んでいたんじゃ？」

「お前。心では、『憐』に点々を付けたやつで呼んでたな」

「なかなかひどいと思わんか？初対面の人に対して『お前』は無いと思うんじゃが」

「じゃあ、お前はどうかんだよ。初対面にしては少し横暴すぎじゃねえか？」

「我はオルタじゃからいいのじゃ」

「何の説明にもなってねえよ！」

"憐"は、手で風呂の水を水鉄砲のようにしてピューッと飛ばしてきた。

「そういう所だ」

「それより、私の呼び方だったな……うむ、これでいこうかの」

スルーしやがった。

「『夏向』はどうじゃ？」

「どっから出てきた、そんな名前」

「さっき私が読んでいた漫画の主人公じゃよ」

「ああ、確かにそんなのあったな。……というか、あれ主人公男だろ」

「そんなのに囚われてはいけないのじゃ。今はジェンダーレス社会じゃよ」

「いつの間にそんな難しい概念を学習したんだよ」

「あの漫画じゃ」

「漫画ってすごいな。それで、他の名前の候補は？」

「真司とか、千翼とか、映司とか……」

「おい、不吉な名前を挙げるな！しかもそれ漫画じゃねえだろ！」

全員死んでるし。2番目に挙げたやつなんて悲惨すぎるし。

「ということで、今から我は夏向じゃ！そう呼ぶがよい！私も貴様のことを『お主』に格上げしてやろう！」

「お前も大概じゃないか」

「夏向と呼ぶのじゃ！」

ばしゃばしゃと水しぶきを上げる"憐"……いや、夏向。

「風呂の中で暴れるなよ！」

やっぱり夏向は女じゃない。



翌日、俺は朝早くから起こされた。

「起ーきーろ！我はもう起きとるぞ！早う飯作れ！」

「ぐへっ！？」

腹の上に衝撃が走った。俺はベッドの上で身じろぎをする。腹の上に夏向が乗っていることに気付く。そこそこ重い。……いや、かなり重い。

「なんだ、なんなんだよ！まだ5時だぞ！」

「我が起きたのだから、お主が起きるのは当然じゃろ？」

「お前の考え方って恐ろしいな」

「我はオルタなのじゃからそうなるのは当然じゃろ？」

「うん、関係ないから」

俺は無理やり体を起こす。夏向がバランスを崩し、こてんと後ろに倒れる。

「で、何だよこんな時間に」

「暇じゃから散歩に行くのじゃ」

「勝手に行けばいいだろ」

「一緒に行くのじゃ！」

「はあ？なんで俺が行かなきゃいけないんだよ。一人で行ってこい」

「お主に拒否権などないわ！」

「お前マジで横暴だな！」

結局、俺は着替えさせられて、外へ連れ出された。

「ほら、早く歩くのじゃ。日が出てないのじゃから、寒いではないか」

「はいはい分かりましたよ。……まったく、子供はこれだから」

「誰がガキじゃ！」

そんなやり取りをしながら歩いていると、青色が特徴的なコンビニにたどり着いた。中に入り、パンやおにぎりなどを購入しようとして、そこで夏向がアイスクリームの存在に気付いた。そういった事に対する知識は皆無なはずだが、「これがいいのじゃ！」と夏向が選んだ物はハーゲン○ッツ。なぜそれを選んだんだよ。

仕方なくハーゲン○ッツも購入し、コンビニを後にする。そして向かうのは夏向と出会った公園。最近あまり人を見かけないが、昔は人も多く集まっていたのが印象的な公園だ。一昨日と同じように、ブランコには誰も座っていない。滑り台にも人はいない。違うのは隣にいるやつ。一昨日は隣で、今日は夏向。

「静かでいいところじゃな」

「そうだな。ここでゆっくりするのもいいかもな。……昼なら」

「そうじゃな」

俺達はベンチに座ってハーゲン○ッツを食べながら空を見上げた。太陽はまだ顔を出さない。それでも、少しずつ明るくなってきている。少しずつ減っていくハーゲン○ッツ、少しずつ明るくなる空。

「……そろそろ帰らないか？さすがに冷えてきた。学校もあるし」

「私も行ってよいかの？その学校とやらの。漫画の方の『夏向』も学校とやらの通っていたからな、面白そうなのじゃ」

「ちょっと待て。お前、学校って何か分かってるのか？」

「それはあれじゃろ？ちょーかっこのいい戦いが見れるのじゃろ？我の力も制御出来るように特訓させてもらえたら良いのじゃが……」

「お前の頭はどれだけ漫画に侵食されてるんだよ！そんな事出来るわけないだろ」

「へ？出来ないのか？」

夏向は心底不思議そうに首をかしげた。

「あのな、そんな事が出来るのはフィクションだけなんだよ」

「ふいくしょん？」

「ああ、そうだ」

「ふいくしょん、って何じゃ？」

「そこからかよ！フィクションってのは虚構ってことだ」

「ということは……ちょーかっこのいい戦いも見れないし、特訓も出来ないということか？！」

がーん、とかそういった効果音が聞こえそうなほど気が沈んでいるであろう夏向を引きずりながら、俺は家へと帰るのであった。

あとがき

えっ、前回よりも少なくなってるって？うそだぁ(汗)

前回のは張り切り過ぎたんです。少し多すぎた気がします。

しかし、ただ少なくなった訳ではないのです！じつはリレー小説の設定を考え、この小説とはプラスαでいろいろ書いたりもしてます。え、他の人も書いてるって？
.....そこはすみません。ほんとすみません。

次は頑張って書くので、許してください。頼む、この通りだぁ！

あとがき

ここまでお読みいただきありがとうございました。今回も今回とて締切が空文化してしまう文芸部の部長、小佐々と申します。何故でしょうね。僕のスケジュール管理能力不足ですね。すいません。

今回の部誌についてですが、特にテーマは決めていません。部員の皆に、自分が書きたい作品を書いてもらうことにしています。そのため歴史異能あり、日常系あり、文芸部らしい文学的なものあり、詩あり、ラノベありとまあ大変カオスなこととなっておりますがお許しください。ちなみに僕は文学っぽいものを書こうとすると戦記になります。硬質な文学との出会いが戦記作家だったんです。で、流石にマニアックなものになりすぎだと思ったので、今のような比較的軽い感じの作品を書いています。軽すぎるかもしれませんが。もちろん戦記系の作品は読むのも書くのも大好きなんですが、こんな感じのものを書くのも読むのも、また別の楽しさがあった大変楽しいんですよ。だから時々いらっしゃる、サブカルチャーを見かけるや否や「そんな訳の分からない物よりも」云々と言う方には、そういう事は無いんだよと言って差し上げたいですね。こんな方、意外と身近にいらっしゃいますよ。探してみましょ。とか言ったらそれなりに重たい話をいつの間にか書いていました。人間って怖いものですねえ。

さて、これを音展公式サイトで読んでいる方には分からない話になってしましますが、今回紙で頒布するほうの部誌には、文芸部員四名によるリレー小説が追加掲載されています。この作品では、現実の文芸部の部室で繰り広げられる日常をモデルに、キャラクターたちが会話し、ゲームし、部員をもふもふ(迫真)し、蹴りを入れます。もう一度言いますが舞台は文芸部です。そして、ここで行われることの七割ぐらいは事実です。「人民の太陽」も実在しますし、夏場はどこからか大型扇風機を取ってきて回しています。さらにいえば部長の立場の弱さも事実です。文芸部って何でしょうね。これ、ゆるゆりのごらく部とかハルヒのSOS団とかの活動記録って言われても信じますよ。つくづく妙な部活になったものだと思います。その原因はほぼ間違いなく我々、普段から文芸部室にいるメンバーなんです。

ともあれ今回も、無事に部誌を発行することが出来ました。校正をお願いした重久先生、表紙担当菊地君、その他今回原稿を提供してくれた部員の皆に、最後に今回この部誌を手にとって下さった活字の向こうの皆様心から感謝を申し上げて、パソコンを閉じます。ありがとうございました！

令和四年九月十六日 文芸部部长 小佐々優大